ポケットモンスター　終らぬ戦い　変わりゆく世界

ジンダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　終らぬ戦い　変わりゆく世界

【Ｎコード】
Ｎ９３８８Ｙ

【作者名】
ジンダイ

【あらすじ】
舞台はカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュの五つの地方からなる世界。
そのひとつ、ホウエン地方の隅にある、ちょっと変わった風習のある小さな村。そこでも他の町と変わらず、今年も新人トレーナーが旅立とうとしていた。しかし、この村特有の最初のポケモンを決める儀式から、少年達は少しずつ、伝説のポケモンの戦いに巻き込まれてゆく。
この話は、人々から忘れられた戦いとそれを止めようとする人と

ポケモンの物語である。

～最初の方は主人公側、敵側共にほのぼのとしていますが、主人公がある程度成長すればシリアスになってくる予定です～

～作者は初心者です。文章的におかしい所があると思いますので、ご指摘してくだされば嬉しいです～

プロローグ（前書き）

初投稿です。

プロローグ

ここは上も下もない、時間も空間も安定しないこの世の裏側、反転世界。
そこにいる2匹のポケモン。
体は白と紫で、首の後ろに管のようなものがあり、長い尾をもついでんしポケモンのミュウツーと、赤いトゲのついた黒い影のような翼をもち、ムカデのような姿をしているはんこつポケモンのギラティナだ。

ギラティナ「そろそろ…始まってしまうのか…」

ギラティナがため息を吐きながら言う。

ミュウツー「戦いは、復讐は何もうみださない…憎しみ以外は…それは私が一番よく知っている」
ギラティナ「そうだな…だが皆はそれに気づいていない…ダークライが上手くやってくれればいいが…」

と、そこへ2匹の後ろに黒い影が地面を這ってきた。

???「帰ったぞ」

そして黒い影からポケモンが出てきた。青く鋭い目に、黒い衣のような体をしたポケモン、あんこくポケモンのダークライ。

ミュウツー「…どうだったか」
ダークライ「シェイミは戦いには反対だが、勝てる訳がないから隠れていると…クレセリアは勝てそうな方に味方すると言っていた

…これからラティオス、ラティアスの所に行くつもりだ」
ギラティナ「すまんな…皆の説得を任せて…」
ダークライ「大丈夫だ、問題ない。オレの力なら素早く移動出来るしな。じゃあ、行ってくる」

そしてダークライは影の中に沈み、消えた。

ミュウツー「私もカントーの奴等を説得したほうが…」
ギラティナ「やめておけ、三鳥はルギアを尊敬している…彼奴等はルギア次第だ。それにオレはディアルガ達には会うことすらできそうにない…アルセウスの裏切り者だしな」
ミュウツー「…そうだな」

ミュウツーはそう言うと、そこらじゅうに浮いているシャボン玉の様なものを見渡す。

ミュウツー「私は前回の戦いには参加していなかった…もう戦いはうんざりだったからな」

ミュウツーは遠くの方に浮いているシャボンを見る。その中には、無人島が写っていた。今だにかたずけられていないガレキがちらばっている。

ミュウツー「しかしもう私がしたような悲劇は繰り返したくない…だからこの戦いを止める」
ギラティナ「オレも同じだ。前の戦いでオレのした事の償いとして、皆の暴挙を止める」
ミュウツー「そのためにも、今はダークライを信じよう」
ギラティナ「ああ、それしかない。十分な数が戦いに反対してくれれば…皆もやめてくれるかもしれないからな…」

そして同じ頃、ある村で運命がうごきだした…

プロローグ（後書き）

後書き

ふ～やっと終わった～途中で意味分かんなくなって3回ほどきぇちゃったよ、本文。

さて、今日から書かせていただく、ジンダイです。文章力は乏しいですが、感想を書いてもらえれば嬉しいです。どうかよろしくお願いします。

6月3日　ポケモンが貰える日（前書き）

第1話　よぅ～～～～～～～やく始動！！！な……長かった…
…軽く3、4回ほどきえたよ……本文……

ナオヤ「惨めだな、作者」

あ、脇役のナオヤ君

ナオヤ「準主人公と言ってほしいね」

一緒じゃん。

ナオヤ「ハァ～、脇役と準主人公の違いも分かんないような馬鹿な作者だと、俺達が苦労するぜ」

（カチン）　それ、本気なのかな？ナオヤ君？

ナオヤ「本気に決まってるじゃないか」

フ～ン　（ニヤリ）　じゃ、本編スタート！！！

ナオヤ「何言ってんだ？作者は？」

6月3日　ポケモンが貰える日

ホウエン地方、キナギタウンとカイナシティの間にある小さな島。
朝、この島のひとつの民家で少年が眠っていた。

少年「ＺＺＺ…」
お母さん「コウタ～朝よ～起きなさい～」

少年の母親がリビングから呼び掛けている。

コウタ「ん…ん～もう朝か…眠む」

少年…コウタは眠そうに目をこする。

お母さん「今日は6月の3日でしょ～いいの～」
コウタ「なぬ!!そうだったのか!!?僕としたことが…今いくぞ!!!」

コウタは跳ね起き、素早く着替えて走る。
この村では、１０歳以上の人は今日…6月3日に最初のポケモンをもらい、旅立つことができるのだ。

コウタ「リビングに到着!!!」

リビングには、すでにパンと牛乳、味噌汁の朝食が用意されていた。

お母さん「早いわね～いつもとは大ちが…」
コウタ「いただきますごちそうさまいってきますダッガチャドガ

ッバタッ」

コウタの朝食は一瞬で綺麗に食べ尽くされ、肝心のコウタは玄関で誰かと激突し、伸びていた。

お母さん「コウタ～気をつけて行ってらっしゃ～い」

お母さんは玄関であった事に気づいてないようだ。

コウタ「痛って…おい！ナオヤ！！危ねえだろが！！気つけろよ！！」

ナオヤ「んなこと言われてもな、お前が急に飛び出してきたからだろが！！！」

この少年はナオヤ。コウタの幼馴染みであり、親友だ。

？？？「全く…二人とも慌てすぎよ」

ナオヤ「メイみたいな乱暴凶悪女には言われたくｎグボホッ」

ナオヤは後ろにいた少女に殴られ、うずくまった。

メイ「だ～れが乱暴凶悪女って？」

この少女の名前はメイ。二人の唯一の女友達だ。というより、この村では１０歳前後の少女は１人しかいない。

メイ「それで、どうでもいいけど二人とも服が乱れ過ぎよ。儀式にはちゃんと正装でいかなきゃ」

そう言って、メイは綺麗に着こなした服をみせびらかす。

ナオヤ「ちっ、年下の癖に」
メイ「なんか言った？（怒）」
ナオヤ「いえ何も（汗）」

ナオヤは昨年の６月後半、メイは一ヶ月前に１０歳になったので、コウタとナオヤの方が年上なのだ。

コウタ（メイって将来、ずっと黙ってたら絶対モテるよな…）

メイの事を密かに可愛いと思っているコウタは、ナオヤがボコボコにされているのを見ながらそうおもった。

メイ「じゃっ、あそこのぼろ雑巾はほっといて祠に急ぎましょうか」

もはや、ぼろ雑巾扱いされているナオヤ。

ナオヤ「……グ…ガハ…」

もはや立てないほどまでボロボロになっているナオヤだが、どうせいつもの事なのでコウタはほうっておいた。

メイ「ねぇ、コウタ？最初のポケモン誰にするの？私はリリーラとホエルコがいいな」
ナオヤ「俺はアノプスとジーランスがいいＺＥ☆」
コウタ（いつもながら復活早）
メイ「黙れ、社会のテスト＊点が。（点数はある人物の要請により削除）」
ナオヤ「ガハッ…ひ、人の古傷をつつくのはやめようか…そのテ

ストは頑張って追試でとりかえしたし…」

しかし、ナオヤが弁解（言い訳）をしている間に二人は先に行ってしまった。

ナオヤ「おい！まってくｒグボハッ」

二人は、ナオヤが何も無いところで転んだ事に気づくはずもなかった。

6月3日　ポケモンが貰える日（後書き）

後書き

ナオヤ「オイ！作者！！」

ん～、何～

ナオヤ「何だよ！あの俺のあつｋ…」

ネタキャラ

ナオヤ「返答早すぎだろ！！？」

じゃあ、また今度。　ダッ！！

ナオヤ「あっ、逃げられた…」

さぁ、いざ祠へ！！（前書き）

ただ今、隣で伝書鳩リネロサースデイが、ぼやきながらＧＥＮＴＳの続きを書いております。

コウヤ「悲愴さんって名前のとおり悲しい人だね…」

作者に似たんでしょ、悲愴もナオヤもモデル同じだし。

コウタ「え!?そうなの!!?」

うん。あの社会のテストも実話だし。でも次のテストでなんと７１点上がったという奇跡を起こした人でもある。

ナオヤ「要するに、俺はすごいんだな」

いや、７１点上がったということは、その前は２９点以下だったということだよ。（しかも上がっても普通レベルだったし）

ナオヤ、悲愴、伝書鳩リネロサースデイ「うるせぇ!!!」

ということで一行だけ、コラボしました。では、本編スタート!!!

さぁ、いざ祠へ！！

3人は最初のポケモンを貰うため、祠に急いでいた。

メイ「そういえば、コウタはポケモン誰にするの？」

コウタ「う～ん、気のあうポケモンなら誰でもいいかな…」

コウヤ「曖昧だな。スクールのアンケートで［最初のポケモンは何がいいですか］っていうのがあったが、何て書いたんだ？」

コウタ「気のあいそうなポケモンって書いた」

メイ「コウタったら…」

一応、この村にもトレーナーズスクールがある。生徒は全部で10人ほどしか居ないが。

コウタ「あっ、見えてきた」

コウタが指差した所は海岸線で、そこには一人の男が立っていた。

ナオヤ「あ、兄貴！！？」

メイ「ユウヤさん！？」

コウタ「ユウヤさんが祠まで連れて行ってくれるんですか？」

この男はユウヤ。ナオヤの兄である。けっこうチャラくて軽い性格だ

ユウヤ「おうよ！いけ！！ジーランス！！！」

ユウヤのモンスターボールから赤い光が飛び出し、中からポケモンが出てきた。

ジーランス「じら～」
ユウヤ「さ、みんなこれに掴まってくれ」

祠は海底の方にあるためポケモンの技、ダイビングを使っていくのだ。
そして４人はジーランスに掴まった。

ユウヤ「行くぜ！ジーランス、ダイビング！！」
ジーランス「じらっ！」

ジーランスの周りに空気の膜ができ、３人を包みこんだ。

バシャン

４人はジーランスと共に、海底へとむかった。

ナオヤ「ガボボボボボボボボボボボ！！！……」

コウヤ（あれ？そういえばジーランスって４人も連れてダイビングできたっけ…）

祠の入り口

ナオヤ「げほっ、げほっ、げほげほげほげほっ」
ユウヤ「悪りぃ、ジーランスは3人乗りだったわ」

むせているナオヤに、ユウヤは全く全然ちっとも反省していない様子で謝る。

メイ「さっ、行くわよ」
コウタ「うん」
ナオヤ「俺についてはノーコメントですか…」

そして4人は祠の奥に向かってあるきだした。

さぁ、いざ祠へ！！（後書き）

後書き

短くてすみません。時間ないんで（汗）

伝統の儀式（前書き）

ナオヤ「1、2日に1回は投稿してるな、作者」

いやいや、どうせ2、3月はほとんど更新できないだろうからね。今の内にしとかなぁ。

ナオヤ「受験か、まっ受かるよう頑張ることだな」

妹にガチで負けてる君には言われたくないよ。（ナオヤがめ○ぜん…プッ）

ナオヤ「リアルの事はいわんでいいい

伝統の儀式

祠、最深部

そこにある巨大な石板の前に、４０代ほどのチョビ髭をはやしている男性…村長がいた。

村長「よく来たな、コウタ、ナオヤ、メイ。案内ご苦労だった、ユウヤ。」

ユウヤ「いいってことよ、村長」
メイ「こんにちは！叔父さん、今日はよろしくお願いします！！」
ナオヤ（メイは村長の姪だもんな、めいだけに）
メイ「叔父さん、ちょっと待っててくださいね」
村長「嗚呼、いいが」
メイ「ナオヤ～ちょっ～とこっち来てくれる？」（怒）

どうやら、ナオヤの心の呟きはメイにお見通しだったようだ。

ナオヤ「ちょっとメイさん、髪の毛引っ張らなくていいよね？痛いんだけど」
メイ「じゃあ、その痛み消してあげるよ♪」（黒笑い）

……

ナオヤ「くぼはあああああああああ！！ぎぃやあああああああああ！！！……」
メイ「終わりました♪」

そして、皆ナオヤの事はスルーして話を初めた。

村長「では、儀式の内容はわかっているな？」

メイ、コウタ「ハイ！！！」

ナオヤ「……ハ……イ……」

まだナオヤは大丈夫なようだ。

村長「まず、儀式の内容を確認する。最初にホエルコ又はジーランスを選び、受けとる。そのあと、儀式を行いもう１匹のパートナーは、アノプスかリリーラかを決める。わかっているな？」

メイ、コウタ「ハイ！」

ナオヤ「ＯＫ！！！」

コウタ（復活早…）

この村では、最初のポケモンがキモリ、アチャモ、ミズゴロウのホウエン初心者用ポケモンではなく、世界の中で野性がここにしか生息していないアノプス又はリリーラ、この島から旅立つために必要な技、なみのりを覚えているホエルコ又はジーランスなのだ。

この島の周りは激しい海流が流れているので、船がとおれず、ポケモンでいくしかないため、ポケモンリーグはこの辺りの島から旅立つトレーナーのみ、ジムバッチ０個でもなみのりを使うのを認めている。

村長「やり方は、まず自分の旅の目標を書いた紙を祭壇の火に投げ入れる。そしてその紙が燃え尽きるまでの時間でパートナーを決める。これもいいな？　では、今から儀式を初める。まず誰から…」

ナオヤ「ハイハイハイ！！！俺から行きます！！！」

コウタ「あっ、抜け駆け…」

メイ「まったく…」

ナオヤは早速、紙に旅の目標を書き炎の中に投げ入れる。

ナオヤ「行けぇい！！」

それと同時に村長はストップウォッチで、炎の中の紙がどれくらいで燃え尽きるのかを測る。

そして、1分位した後、紙は完全に燃え尽きた。

村長「え～と…今のタイムから……ナオヤ、君は、……」

村長は何やら名簿の様なものをみていたが、口を開いた。

村長「アノプスだな」

ナオヤ「イョッシャアアアアアアアアアア！！」（ドヤ顔）

ナオヤは自分の欲しかったアノプスが選ばれ、思わずドヤ顔をしたが、

メイ「キモイ」

コウタ「それは…ちょっと……」

ユウヤ（プププ、バッカじゃねえのか、こいつ）

村長「……」（失笑）

うけなかった様だ。

ナオヤ「……」（泣）

メイ「さ、しょげてるやつはほっといて私の番♪」

メイが張り切って儀式をしている間、コウタは壁の凹凸を触っていたユウヤに、気になっていたことを聞いた。

コウタ「あの…ユウヤさん…」
ユウヤ「ん、何だ?」

ユウヤは壁から手と目を離さずに答える。

コウタ「どうしてこの村には、こんな儀式があるんですか?」
ユウヤ「この儀式が発祥した訳か?」
コウタ「はい。何か知っていますか?調べたけど何処にも書いてなくて」

ユウヤはやっと壁から目を離して言った。

ユウヤ「悪ぃ、俺も知らん」
コウタ「そうですか…」

コウタは少し、がっかりした様子だ。

ユウヤ「そもそもこの儀式自体、あまり意味ないしな」
ナオヤ「どうゆうことだ?」

いつの間にか復活していたナオヤが聞く。

ユウヤ「実は最初のポケモンは、みんなもう決まってんだ、スクールのアンケートで。この儀式は形だけだよ」
コウタ、ナオヤ「……」

二人は絶句する。

ユウヤ「この事は、なるべく秘密にな♪」
ナオヤ「……なんで、こんなまわりくどいことするんだ?」
コウタ「伝統だからだろうね…」

その時、メイが儀式を終わらせて戻ってきた。

メイ「お～い、コウタ～ナオヤ～　私はリリーラとホエルコになったよ♪」
コウタ「う、うん。」
ナオヤ「よ、よかったな」

もうポケモンは決まっていたということを知ってしまった二人は、複雑な気持ちでメイにこたえる。

メイ「?二人共どうかした?」
コウタ、ナオヤ「いっ、いえ、何でもありません!!!」（汗）
メイ「そう?」

慌てていた二人をメイは疑わしそうに見ていたが、ポケモンをもらったことで機嫌が良いらしくそれ以上何も聞かなかった。

コウタ「次は僕の番か…行ってくる!」
ナオヤ「お、おう。」
メイ「行ってらっしゃ～い。自分の好きなポケモンが貰えるといいね♪」

その言葉を聞いた二人は、また複雑な表情になる。

コウタ「う、うん…そ、そうだね」（汗）
ナオヤ「アハハハハハハ…」（汗）
メイ「本当にどうしたの？二人共？」
コウタ、ナオヤ「いっ、いえ！！本当に何でもありません！！！」
（汗）
メイ「？」

キョトンとしているメイの横を走って通り過ぎ、コウタは村長の元へ向かった。

村長「では、今からコウタの儀式を初める」
コウタ「ハイ！！！」

コウタは紙を受けとると、早速かきはじめた。

コウタ（あれ？僕みたいに欲しいポケモンの名前をはっきり書いてない時はどうなるんだろう……）

コウタは書きながらそういうことを考えていた。

ユウヤ（はっきり書いてない奴は、村長がどっちをやるのか決めるんだったな…コウタはどっちになるんだか）

そして準備が完全に済んだコウタは、紙を炎に投げ入れ、その紙は燃え出す……

はずだった。
紙は炎の中にはいるも、すぐにそこから真上に飛び出し、しばらく空中をまったあと、村長の後ろにある石板の上に乗ってしまった。

村長「ま、まさか……こんな事が本当に!?……」

村長はかなり動揺している。

コウタ（あちゃ～しくったかな…）「すみません、もう一度やり直します」

コウタが石板に手を伸ばし、紙を取ろうとしたのだが……

村長「やめろコウタ!!!お前のパートナーはもう決まった!!!」

半分取り乱している村長の声により、中断させられた。

コウタ「どうゆう事ですか?」（アノプスかリリーラどっちだろう…）

村長「……お前のパートナーとなるポケモン達は…この中にいる」

なんとか落ち着きを取り戻した村長は石板を指差す。

ユウヤ「一体その石板の上に紙がのったらどうなるんですか?村長」

ナオヤ「この石板がポケモンなのか？」

兄弟で村長に問う。

村長「いや、正確にはこの祠の奥に封印されているポケモンだ…儀式の紙が石板の上にのったということは……まさか代々伝わる、儀式の元になっている話が現実になるなんてな…夢にも思わなかったことだ」

コウタ「一体なんの話を……」

村長「コウタよ、こちらにこい…今から石板の封印を解き、お前のポケモンと会わせる…お前は守護神に選ばれしものだ…」

運命の歯車は加速を始める…この少年達と守護神と呼ばれるポケモン達との出会い……そしてまた、別の出会いにより……運命はもう、止まらない。

伝統の儀式（後書き）

後書き

コウタ「で、結局僕のポケモンは？」

それは秘密。

コウタ「まぁ、いいか。どうせ次わかるし…」

分かんないよ。

コウタ「分かんないの！！？」

だって次回とその次の話では、君達の出番はないし。

コウタ「じゃあ誰がでるんだよ！？」

次回は新キャラが出る、とでもいっておくよ。

コウタ「次の次は？」

いや、流石にそれは言えないね。

コウタ「……どうしてもダメですか？」

うん、ダメ。

コウタ「じゃあ僕にだけ」

しょうがないな～　ゴニョゴニョ

コウタ「えっ！？あいつが！！」

そだよ。じゃあ今日はこの辺でさよなら～

コウタ「唐突におわったな……」

＊7人のトレーナー＊（前書き）

よし、第5話完成っと。2日かけて5、6時間ほどかかったよ。

ナオヤ「短い割には時間かかり過ぎじゃね？」

DSのタッチパネルで書いてたらそりゃ遅いわ。

ナオヤ「はぁ、DS！！？どういうこった！？」

今までの小説は全て3DSやDSIのインターネットブラウザーで書いてました。画面閉じたら文章消えるわ、考えてたら急に接続切れるわでもう大変だよ……

ナオヤ「PC持ってないのか？」

持ってるのは持ってるけど親がインターネットに接続することを許してくれない！！！

ナオヤ「悲しいな、だからいつもあんなに短かったのか」

そうだよ、でも君のモデルである伝書鳩リネロサースデイからは本名と住所さえばらさなければナオヤに何をしても、何を言ってもいいっていう許可なら出たよ。

ナオヤ「その許可はいらあああああああああああああん！！！」

さて、僕が一生懸命書いた第5話、スタート！！！

＊7人のトレーナー＊

ＡＭ６：００
ここは１１９番道路、野生のヒンバスが生息している場所だ。
この道路の隅に立ててあるテントから、一人の男が出てきた。

？？？Ａ「ふぁ～、よく寝た～」
？？？Ｂ「おはようございます、ブイマル先輩」

すでに外にいた青年が挨拶をする。

ブイマル「おはよ、ヒカル」

この二人は、ブイマルとヒカルというようだ。

？？？Ｃ「……いい…朝だな……」

テントの裏に座っていた男が言う。

ブイマル「おう、ミスト。おはよ」
ミスト「……おはよう……」

この男は、ミストというらしい。結構無口な様だ。その時、

？？？Ｄ「おっはようご☆ざ☆い☆ま☆す！！！」
？？？Ｆ「今日も！元気に！！いっこうＺＥＥＥＥＩ！！！」

テントから、異様にテンションが高い二人が出てくる。

ヒカル「マサヤ…シュウ先輩…いつもながら、朝から元気よすぎですね…」

ヒカルが呟く。この二人の名はマサヤとシュウ。

マサヤ「シュウさん☆朝バトル行きましょう☆!!!」
シュウ「ＯＫ!!いっくＺＯ!!メタグロス!!!」
マサヤ「ドリュウズ!!!ＧＯ☆!!!」

早速、朝一番にバトルをするマサヤとシュウ。

???Ｆ「なんだなんだ?また、マサヤとシュウか!?」
???Ｇ「にぎやかなこった」

また、テントから二人の青年が出てきた。

ブイマル「おっ、リョウヤ、ハヤト、おはよ」
ヒカル「おはようございます!!!」

二人の名はリョウヤとハヤトである。

リョウヤ「おはよ」
ハヤト「おは～…なんか腹へった～」
ブイマル「そうだな、メシにするか」

そしてブイマル、ヒカル、リョウヤの三人は朝御飯の準備を始め、ハヤトは魚を捕るため、川へ行った。

リョウヤ「行け、ロトム!!!」

リョウヤがモンスターボールを投げると中からプラズマに身を包んだポケモン、ロトムが出てきた。

ロトム「トム～」

そこでリョウヤは何やら特徴のあるモーターが付いた電子レンジを取り出す。

リョウヤ「ロトム、こいつを頼む」
ロトム「ロトッ！」

ロトムは電子レンジの中に入り、ヒートロトムへとフォルムチェンジする。

リョウヤ「よし。ロトム、よろしくな。じゃあまずはこれと…あれと…」

ロトムはリョウヤに渡された冷凍食品を、どんどん暖めていく。
と、そこへハヤトが帰ってきた。

ハヤト「お～し、魚捕ってきたぞ～」
ブイマル「でかしたぞ！ハヤト」

ブイマルが焚き火でご飯を炊きながら言う。
ヒカルは自分のエレキブルの炎のパンチ（弱火→中火）で目玉焼きを作っている。

ハヤト「よし、じゃあ俺も魚を焼くとするかな。いくぞ！サザンドラ！！」

ハヤトはボールから、サザンドラを出す。

ハヤト「サザンドラ、弱火の火炎放射」
サザンドラ「ドラッ！！」

ハヤトとサザンドラは魚を焼き始めた。

シュウ「メタグロス、コメットパンチ！！！」
マサヤ「穴を掘るでかわせ！！」

シュウとマサヤの二人はバトルをしている。
ミストはそんな6人を黙って見守っている。そして、食器の用意をしはじめる。
準備をしていないシュウとマサヤは量を減らされ、次こそはちゃんと準備するぞ、と昼には忘れる誓いをする。

これがこの7人の、日常の光景である。

午後４時頃、ヒマワキシティ。
ツリーハウスの立ち並ぶ町に、あの７人の姿があった。

ブイマル「さぁ、まずはポケモンセンター、そこからヒマワキジムだな」

どうやら彼等は、ジム巡りをしている様だ。しかし全員ではない様子。
ポケモンセンターとは、赤い屋根の大きな建物で、そこでは受付にジョーイさんという人がいる。この人たちは皆親戚で女の人はそっくり同じ顔をしている。

シュウ「絶対バッチをＧＥＴするＺＥ♪」
マサヤ「頑張って下さいよ☆ブイマルさん☆にシュウさん☆」
リョウヤ「ひとまず、俺らはトレーニングにでも行くか、ハヤト」
ハヤト「そだな。ヒカル、お前も来るか？」
ヒカル「はい！よろしくお願いします！！」
ミスト「……」

７人はポケモンセンター…通称ポケセンへと向かった。

ヒマワキシティのポケセンは町の西側にあった。早速入り、ジョ

ーイさんに傷ついたポケモンを預ける。その後、預けなかったポケモンと共にそれぞれの場所へと向かった。

ヒマワキジム

シュウ「たのもぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」
ブイマル「騒がしいぞ。迷惑だろうが、シュウ」

大声を出してジムに入るシュウをブイマルが抑える。
二人が奥に進むと、そこには飛行機のパイロットの格好をした女性、ヒマワキジム、ジムリーダーのナギが立っていた。

ブイマル「お久しぶりです、ナギさん」
ナギ「あら、誰かと思ったらブイマル君にシュウ君じゃない。久しぶり。昨年のリーグは惜しかったわね」

どうやら彼等は彼女と顔見知りの様だ。

ブイマル「はい、まさか予選の最初で相手がミストとは思いもしなかったですよ」
シュウ「あのマサムネとかいうやつ…かなり強かった……」

シュウが珍しくうなだれ…

シュウ「だが俺はへこたれないＺＥＥＥ！！！次は必ずかぁぁつ！！！」

ても無かったようだ。

ナギ「そう言えばあとの５人はリーグでＢＥＳＴ８まで入ってたっけ？」

シュウ「はいってましたＹＯＯ！！！」

この世界では、各地方にあるジムのジムリーダーを倒すことで手に入るバッチを８個、集めることで５つの地方で行われるポケモンリーグと言う大会に出ることが出来る。まずは、バッチを８個あつめたトレーナーと昨年のリーグでＢＥＳＴ８入りした者で予選を戦う。その勝者と昨年のＢＥＳＴ４入りしたもので本選を行い、優勝者を決める。

さらに、優勝者と準優勝者はこの世界で最もレベルの高い、全ポケモントレーナー憧れの大会…ワールドチャンピオンリーグ（通称ＷＣＲ）に参加することができる。ＷＣＲに参加出来るのは、他に各地方の四天王、チャンピオン、フロンティアブレーン等の凄腕のトレーナーばかりだ。２か月にも及ぶ総勢４０人ほどが争うリーグ戦のチケットは、プレミアがつくほど。

開催する地方はローテーションで変わり、昨年はシンオウ、今年はイッシュで行われる予定だ。

ブイマル「ミストが昨年のホウエンリーグ優勝、ＷＣＲで１８位でしたね。ハヤトとリョウヤが準決勝で引き分けたんで昨年はホウエンから３人、ＷＣＲに行ったことになります」

シュウ「リョウヤはＷＣＲで２８位、ハヤトは２６位だったよな」

ナギ「みんな頑張ってるわね」

ナギは感心しているが、ブイマルはまだ心残りがあるようだ。

ブイマル「本当なら俺達の中でミストの次に強いのは俺なんだけどな…」

シュウ「勝負は時の運、ダッＺＥＩ！！！」

シュウがブイマルを持ち前の高いテンションで励ます。

ブイマル「そうだな…よし！ナギさん、ジム戦お願いします！！！」

再び元気になったブイマルはナギにジム戦を申し込む。

ナギ「いいわよ。こっちも実力を測る、何てことは言わずに全力でいくから！！セイカ、審判をお願い」

セイカと呼ばれたヒマワキジムの門下生はバトルフィールドの手前に立つ。ブイマルとナギも配置につく。

セイカ「では、今からヒマワキジム、ジムリーダーのナギとチャレンジャー、ブイマルのジム戦を開始します。ルールは３ｖｓ３の勝ち抜き戦、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。それでは、バトル開始！！！」

勝負は一瞬でついた。

セイカ「ジ、ジムリーダーの…チルタリス戦闘不能……よってこの勝負、チャレンジャー、ブイマルの勝利」

ナギ「流石ね……」

一瞬で3匹のポケモンがストレート負けし、項垂れるナギは倒れているチルタリスをモンスターボールに戻す。

シュウ「よ〜し、次は俺と…」

飛び出そうとするシュウを、ブイマルは自分のポケモンをモンスターボールに戻しながら止める。

ブイマル「まて、今ナギさんとそのポケモンは戦ったばかりだぞ」

ナギ「お気遣いありがと、ブイマル君。私は今からポケモン達をポケモンセンターに預けてくるわ。シュウ君とはその後、さっきとはまた別のポケモンで相手してあげるから」

シュウ「まじすか?よっしぁ☆!!ヒャホ〜オゥイ」

今のナギの言葉を聞いて、テンションが上がるシュウ。

そして、そのバトルもシュウが一瞬で制す。

シュウ「へへへ、バッチＧＥＴだぜ！！！」

目的を果たした二人は、ナギと別れ皆の所へ向かっていた。

ブイマル「もうすぐ待ち合わせの時間、急ぐぞ」

そして、集合場所では既に５人が待っていた。

ハヤト「遅いぞ～二人共～」
リョウヤ「勝ったのか？」
シュウ「勿論ＳＡ！！！」

シュウはヒマワキジムに勝った証、フェザーバッチを見せる。

マサヤ「やりましたね☆おめでとうございます☆ブイマルさん☆、シュウさん☆！！！」

ヒカル「じゃあ、次はトクサネシティですね」

ミスト「……行くぞ……」

7人は歩き始める。

次の目的地に向けて……

＊7人のトレーナー＊（後書き）

後書き

さあ、新キャラ一気に7人登場で～す。

ナオヤ「出しすぎじゃね！？」

大丈夫大丈夫。心配ないさ。

ナオヤ「そうだろうか…」

コウタ「次回はあのポケモンですよね！あの……」

コウタ君、それ以上は言ったら駄目だよ。

コウタ「わかってますよ、そのくらい」

ナオヤ「何だ何だ？何の話をしてるんだ？」

教えちゃ駄目だよ。

コウタ「ハイ！」

ナオヤ「？？？」

コウタ「さて、僕達はこの辺で」

さようなら～。あ、後あの7人はチートではありません。さて、

皆さん、次回をお楽しみに！！！

＊ダークライ＊（前書き）

Ｙｅａｈ！！Ｌｅｔ＇ｓ　ｐａｒｔｙ！！！

ナオヤ「どうしたんだよ、（リアルの）俺の口癖なんか叫んで」
コウタ「パーティって…何か良いことでもあったんですか？」

Ｙｅｓ！！！　祝！！！！
執筆中又は投稿前の本文消失１０回突破！！！

ナオヤ「全然良いことでもめでたいことでもねぇ！！？」

だって…もう既に１２回……あらすじと前、後書きを含めたら１５回消えてるんだよ、もう笑うしかないね。
アハハハハハハハハハハハ

ナオヤ「作者！しっかりしろ！！！」
コウタ「壊れないでください！！」

アハハ……ハァ～もうＤＳやだぁ……

コウタ「読者の皆さん、なんだか愚痴みたいになってしまい、誠にすみませんでした。それでは、本編スタート！！！」

＊ダークライ＊

ミスト達7人がヒマワキシティを主発した頃、一匹のポケモンがホウエン地方の上空を飛んでいた……ダークライだ。

ダークライ「くそっ、くそっ、くっそぉぉぉ！！！ラティオスもラティアスもジラーチも…あの分からずや共がぁぁぁ！！！アイツらはこの戦いが世界の危機ということがわからんのかぁぁぁ！！！」

……なにやら絶叫している。

実は先程、ラティオスとラティアスには「この戦いには、一切介入しない」と断言された上に、ジラーチに至っては「めんどくさい……もう寝る…」とまで言われていた。しかし特性のナイトメアやあくむで眠っていたジラーチを、無理やり起こしたダークライも悪いのだが。

ダークライ「……くっ…流石に6匹だけでは争いをくい止めるのはまず無理だろう……他に協力者を探さないと……」

その時、ダークライは北の空にオーロラの様なものが出ていた事に気づく。

ダークライ「あれは、たしか……よし、行ってみるか」

ダークライは北の空に向かって飛んだ。

ミナモ沖、上空。

???「何しに来た…ダークライ」

ダークライ「……デオキシス」

オーロラの下に居たのは、胸の中心に紫色の水晶を持つオレンジと薄緑色のポケモン、デオキシスだった。

ダークライ「……ひとつ話したい事がある…聞いてくれないか？」

デオキシス「丁度いい、俺もお前に話があった」

それを聞いたダークライは、デオキシスが自分達に協力してくれるのかと期待したのだが…

デオキシス「ミュウやレックウザ達と共に戦わないか？」

期待どうりではない…いや、むしろ正反対の事を言ってきた。

ダークライ「…お前…ミュウ達と…」

デオキシス「嗚呼、俺はそっちに協力するつもりだ。ダークライ、お前が来たら戦力になる……一緒に戦わないか？」

ダークライは首を横に振る。

ダークライ「……お前達のやっている事は間違っている…あんな無茶苦茶な目的、果たされてよいはずがない！」

デオキシス「…そうか……お前が噂の戦争反対派か……」

デオキシスは敵意をむき出しにしてきた。

デオキシス「もう一度きく、俺達と来る気は無いんだな」

ダークライ「嗚呼、無い」

デオキシス「残念だ…お前ならわかってくれると思ったのだが…それならしょうがない……覚悟しろ、ダークライ」

二匹はしばらく睨みあっていた。

デオキシス「しんそく！」

ダークライ「まもる！」

デオキシスは細身の素早そうな姿…スピードフォルムになり、ダ

ークライにしんそくで向かって行ったのだが、ダークライはデオキシスがスピードフォルムになる一瞬の隙にまもるを繰り出し、しんそくを防ぐ。

デオキシス「ちっ」

ダークライ（俺はデオキシスを倒す気はない…ひとまずこの場を収めなければ…）

デオキシスは弾かれた勢いでダークライの後ろに回り込みながら、体が全体的に鋭くなった姿、アタックフォルムになる。

デオキシス「ばかぢk…」
ダークライ「ふいうち！」

デオキシスがばかぢからで攻撃しようとするも、ダークライは先制技でさらに後ろに回り込み、先に攻撃。それにより、デオキシスのばかぢからは止められてしまった。

ダークライ「ダークホール！」

ダークライは畳み掛ける様に、敵を暗黒の眠りへと誘う技、ダークホールを使った。

デオキシス「しんぴのまもり」

今度はゴツイ姿、ディフェンスフォルムに変わったデオキシスがダークホールをしんぴのまもりで防ぐ。

ダークライ（くっ……一旦デオキシスを眠らせて、この場をどう

収めるのか考えようと思ったんだが…）

さらにデオキシスは、スピードフォルムへと姿を変え、

デオキシス「しんそく！」

デオキシスは再び、しんそくでダークライに向かっていった。

ダークライ「まもる！」

ダークライは咄嗟にまもるを発動させたのだが…

デオキシス「甘い！」

デオキシスはしんそくで攻撃せずにダークライの後ろに回り込む。

ダークライ（しまった！……いや、奴はおそらく攻撃するときにアタックフォルムになるだろうから、その隙に攻撃すれば…）

と、考えたダークライがあくのはどうをためながら振り向くと…

デオキシス「ばかぢから！！」

ダークライ「なっ…」

デオキシスはアタックフォルムにならず、スピードフォルムのまましんそくの勢いに乗ってばかぢからをはなった。その速さに反応しきれなかったダークライはばかぢからを真正面からくらう。

ばかぢからは格闘タイプなので、ダークライに効果は抜群だ。

ダークライ「が…」

ダークライは倒れはしなかったものの、よろめき、落下しそうになる。

その隙にデオキシスは、上昇しながらアタックフォルムへとその姿を変える。

デオキシス「終わりだ。めいそう…はかいこうせん！！！」

ふらついているダークライに向かって、デオキシスは上から叩きつける様にはかいこうせんを放つ。

ダークライ「……っ」

ダークライは悲鳴をあげる間もなく、遥か下の海へと落ちていった。

デオキシス「やったか……だが、ダークライを捕らえておけば、後から有利になるかもしれんな……よし」

デオキシスはダークライが上がって来ない事を確認すると、自分の影の様な…分身の様な者を大量に造りだした。

それはダークライを探し、下の方へと向かって行った。

＊ダークライ＊（後書き）

後書き

ということで、ジンダイ初のバトルシーンでした。うまく書けたかな…（汗）

コウタ「ていうか、ダークライさんの性格が最初と最後で違う気が…」

……まぁ、いいんじゃない？彼の個性なんだよ、きっと

コウタ「そうですか…次は僕たちだよね」

うん、コウタのパートナーとなる守護神と呼ばれるポケモン達とは何者なのか！？

コウタ「次回もよろしくお願いします！！！」

守護神をゲットせよ！前編（前書き）

ウギァァァ～～～～～～！！！

ナオヤ「どうした！？」

今気づいた～まじで！！！

コウタ「何がですか！！？」

自分の受験が…3月と思ってたら……1／24だ～～～～～～～～！！！

ナオヤ「2ヶ月も間違えてたじゃん！！！」

コウタ「どうするんですか！！？」

……いまから2ヶ月くらい休ませてください…↑土下座

ナオヤ「しょ～～～がねぇ～なぁ～～、休ませてや、る、よ」

……ありがとうございます（後から覚えとけよ…ナオヤ）

コウタ「ということで、唐突ですが、今年最後の一話、スタートです！」

ナオヤ「うちのボケ作者が迷惑かけて、本当にすみません！いつもの事ですが今回はさらに酷い文章です！やはりうちの作者は間抜けです！」

……↑反論出来ない。

守護神をゲットせよ！前編

コウタ達は村長の放った言葉に呆然としていた。

コウタ「守護神？」
ユウヤ「儀式の元になっている話…聞いた事も無いな…」
メイ「一体どんなポケモンなんですか？」

村長「…すぐにわかる、コウタ、こっちへ来い」
コウタ「あ、はい…」

コウタが石板の前に立つと、村長は2つのモンスターボールを取り出した。

村長「最初はホエルオー……」

モンスターボールを1つ、石板の上へと乗せる。

村長「最後はジーランス……」

今度はもう1つのモンスターボールを、石板の下に置く。

村長「そしてすべてが……ひらかれる」

ズズズズズズズズ
急に石板が震動を始める。

メイ「なななな」
ユウヤ「何だ！？急に！！？」

ナオヤ「石板が…」
コウタ「割れていく……」

コウタ達の言う通り、石板は音を立てて割れ始めていた。

村長「今のは、この石板に書かれている言葉…そしてこの場所、『御触れの石室』の守護神を呼び出すために必要なことだ……」

そして、完全に石板が割れた。その奥には、それぞれ氷、岩、鋼の体をしたポケモン達が立っていた。

ユウヤ「……村長……」
村長「なんだ?」
ユウヤ「これは…どうゆう事ですか……」

ユウヤはそのポケモン達を見て、驚愕していた。

メイ「あのポケモン達は?」
ナオヤ「見た事ないポケモンだな…」
コウタ「ユウヤさん、あのポケモン達は…何なんですか……?」
ユウヤ「俺も古い文献とかでしか見た事はないんだが……まさかここにいたとは……夢にも思わなかった……」

村長が4人の方に向き直る。

村長「……嗚呼、あのポケモン達は…

伝説のポケモン、レジアイス、レジロック、レジスチルだ」

コウタ、ナオヤ、メイ「！！！」

ユウヤ「村長、何故この3匹がこんな所に…」

その時、村長が自分の方を見た事に気づいたコウタは、とっても嫌な予感がした。

コウタ「あの…もしかして……この3匹って……」

???A「ソノマサカダ、マスター」

急に声が聞こえた。

ナオヤ「何だ、この片言は?」

???A「ワタシダ」

皆は声のする方を見る。

レジスチル「ワタシハ、レジスチルトイウ」

全員「……喋ったぁぁぁぁぁ！！?」

？？？B「喋っちゃあ駄目なのかよ、屑共が」
？？？C「ロック、あなたは何時も口が悪いですよ」

さらにあと2人…いや、2匹の声がした。

コウタ「まさか…後の2匹も…」
レジロック「よっ、お前が俺達のパシリになってくれる奴か。頼りねぇなぁ。と、俺はレジロック」
レジアイス「私はレジアイスです。ロック、言葉を慎みなさい。あの人はあなたのパシリではなく、（あなたみたいに馬鹿そうですが一応）マスターですよ」

レジロックは今の言葉で、頭にきたようだ。

レジロック「なんだと!?このオカマが!!!」
レジアイス「誰がオカマなんですか？」
レジロック「お前が女言葉ばかり使って気持ち悪いからだよ!!!」

今のはレジアイスもカチンときたようで、

レジアイス「これは敬語と言います。あなたみたいな（単細胞で短足の）人にも（しょうがなく）敬語を使って（やって）るんですから感謝しなさい」
レジロック「んなもんするかよ!第一全部聞こえてるぞ!!この氷オカマが!!!」

コウタ達全員が呆然としてるなか、口喧嘩（というより罵り合い）を始めた。

レジアイス「いい加減怒りますよ？」
レジロック「勝手に怒っとけよ、オカマ野郎！！！」
レジアイス「オカマオカマと…あなたはそれしか言えないんですか？」
レジロック「うるせぇ！！！やんのかコラァ！！？」
レジアイス「良いですよ。後で後悔しても遅いですからね」
レジロック「おう！！上等だ！！！来い！！！」
レジアイス「行きますよ」

2匹は身構える。

コウタ「オカマとかいってるけど…」
ナオヤ「兄貴、あの2匹って性別あんの？」
ユウヤ「いや、無い」
メイ「第一…あの無表情で口喧嘩されても……」
村長「本当に怒っているのか解らんな、ナレーターのしようもない」
コウタ「ナレーター？」
村長「いや、こっちのはなしだ」

レジアイス「きあいだま」
レジロック「失せろ！きあいパンチ！！」

ズドォォォン！！！

レジアイスの腕からはなたれたオレンジ色の気合いの塊と、レジロックの拳に集まった気合いの塊がぶつかりあった。

コウタ「すごい迫力だ！！！」
ナオヤ「言ってる場合か！！？」

レジアイス「ラスターカノン」
レジロック「ほのおのパンチ！！！」

レジアイスの放った灰色の鋼弾を今度は炎を纏った拳ではねかえすレジロック。

レジアイス「でんじほう」
レジロック「かみなりパンチ！！！」
レジスチル「ヤメロ！マモル！！」

今度はレジスチルが間に入り込み、レジアイスの電撃を帯びた弾とレジロックの雷を帯びた拳をまもるで防ぐ。

ユウヤ「おっ、止めに入ったぞ」
メイ「鋼タイプは岩タイプにも、氷タイプにも強いから…もしかしたら止められるかも…」

レジアイス「きあいだま」
レジロック「きあいパンチ」

二匹の技の間には、まもるを終えたばかりのレジスチルがいる。

レジスチル「チョットマｔ　ギャァァ！！！」

まもるは連続で使えないので、レジスチルはもろに二匹の攻撃を受けしまった。

レジスチル「クッ…マダｄ」
レジアイス「鉄屑は黙ってて下さい、れいとうビーム」

レジロック「ああん？うっぜえんだよ片言野郎！！！れいとうパンチ！！！」
レジスチル「……」
レジスチルは、完全に凍りついた。

コウタ「あっ…」
ユウヤ「ヤバいなぁ……」
メイ「レジスチル…弱っ！？」
ナオヤ「……」
何やらナオヤがレジスチルに拝み始めた。
コウタ「どうした？ナオヤ？」
ナオヤ「あのレジスチルと言う奴…何か俺と同じ匂いがする…気のせいか？」
ナオヤは真顔で言う。

コウタ「う、うん…気のせいじゃない？」（絶対気のせいじゃない！例え命をかけても気のせいな訳あるか！ナオヤとレジスチルは似た者同士…いや、もはや兄弟同然の境遇だよ！！！）

コウタは心の叫びを押しとどめ、誤魔化した。

ナオヤ「そっか…そうだよな…」
コウタ「そっ、そう！そうだって！！」
村長「コウタ…話している所悪いが…今はそれどころではないだろう。ほら、受けとれ」

村長はコウタに3つのモンスターボールを投げ渡す。

コウタ「えっ！？」

コウタはあたふたしながら受け取った。

コウタ「あの～もしや～僕にこの3匹をゲットしろと？」

村長「そうだ」

コウタはお互いに技のぶつかり合いをしているレジロック、レジアイスと完全に凍りついているレジスチルの方を見る。

コウタ「すみません。無理です」

レジスチル「コウタヨ、オマエハワガアルジタチニワタシタチノマスタートシテエラバレタノダ」

レジスチルが凍ったまま話しかけてきた。

レジスチル「ダカラ、ハヤクワレワレヲツカマエ…」

レジロック、レジアイス「「だまれ！！！黙りなさい」」

レジロック「ほのおのパンチ！！！」

レジアイス「きあいだま」

再びレジスチルに攻撃をする二匹。

レジスチル「オマエタチヤメｒ　グガバッ」

レジスチルは反対側の壁まで吹き飛ばされ、祠改め、御触れの石室の壁は悲鳴をあげる。

コウタ「村長、帰る時は何処から出ればいいんですか？」

村長「いや、帰る気なのか？」
コウタ「はい。もう付き合ってられません。僕は普通のポケモンで十分ｄ…」
レジスチル「マスター…」

どうやらレジスチルは（一応）無事だったようだ。

レジスチル「マ…マズハワタシヲ…ツカマ…エ…ロ…バタッ」

レジスチルは倒れた。

村長「ほら、コウタ、今の内にモンスターボールを」

村長はそう言うが、肝心のコウタは…

コウタ「ああ、空が綺麗だ…」

現実逃避をしていた。

ユウヤ「お～い、戻ってこ～い、ここには空はないぞ～」

コウタ「アハハハハハハハ天井が綺麗だなぁ♪」

ユウヤ「…行け、ペリッパー」
ペリッパー「ペリ！」

ユウヤは自分のモンスターボールからペリッパーを出した。

ユウヤ「ペリッパー、そこのぼけっとしてる奴にみずてっｐ」
コウタ「アハハハハハハここはどこ？僕はだれ？」

ユウヤ「……やっぱりハイドロポンプ」
ペリッパー「ペッ～リィ！」

ペリッパーは口から思いっきり水を打ち出す。

コウタ「バボッ…」

コウタの顔面に水がかかる…というよりぶつかった。

コウタ「何するんですか！！！」
ユウヤ「いいから状況をよく見ろ！！！あんなに二匹が暴れていてここが無事だとでも思うのか！？ここまで耐えてるのが奇跡だって！！！」

ナオヤ「あっ…」
メイ「そう言われてみれば…」
コウタ「ヤバイかも…」

そこにいる5人は一斉に青ざめる。

村長「いかん！ここは海底だ！！崩れたりしたら…コウタ！！！」

コウタ「はっ、はい！！！」

コウタは慌てて返事をする。

村長「早くレジスチルを捕まえんか！！！」

コウタ「ははははい！」（いいのかな…）

コウタは倒れているレジスチルに躊躇しながらモンスターボールを投げる。

レジスチルはモンスターボールから放たれる赤い光に吸い込まれ、そのままモンスターボールはその場で振動を始める。

そしてモンスターボールは完全に静止した。

コウタ「レジスチル…ゲットしちゃた…」
メイ「伝説のポケモンかぁ…コウタ凄いじゃん！」
ナオヤ「強いんだろうな…いいなぁ…」

と、話しているのも束の間、

レジアイス「ふぶき」
レジロック「ぶっ飛べ！！！ストーンエッジ！！！」

ズドォン！！！

二匹の威力最強の技がぶつかり合い、大きな震動が起こる。

それにより、堂々御触れの石室の壁にひびが入り、浸水し始めた。

村長「ヤバイぞ！皆、ダイビングが使えるポケモンを出せ！！」
ユウヤ「おう！ジーランス！！」
ナオヤ「お、俺も？…ジーランス行ってくれ！」
メイ「私も！？わわっ、ホエルコ！」

皆は自分のポケモンを出すが、

コウタ「そう言えば僕…まだジーランスもホエルコも貰ってない…」

コウタは何も出来ず、呆然としていた。

村長「あっ！すまんコウタ！！ポケモンを渡すの忘れてた！？」

ユウヤ（またか…何時もは一年に二、三回忘れるから、今年はいい方なんだが…）

ユウヤは忘れっぽい村長に内心呆れていた。

村長「ひとまずこいつに乗れ！ジーランス！！」

村長は自分のジーランスをだす。

その時、堂々御触れの石室が本格的に崩れ始めた。

村長「本格的にヤバイぞ！皆、早くダイビングの指示を！！」

４人は自分のポケモンに、コウタは村長のジーランスに掴まった。

コウタ（結局僕のポケモンについてはスルーですか…）

村長「いくぞ！」

村長、ユウヤ、ナオヤ、メイ「ダイビング！！！」

バシャン！

5人はダイビングを使い、空気の膜に包まれて崩れる祠から抜け出した。

レジロック「ガバババババ……」
レジアイス「勝負ありましたね…」

見ると、レジアイスVSレジロックの勝敗が着いたようだ。岩タイプであるレジロックは水に弱いため、溺れていた。レジアイスは平気そうな感じだ。

コウタ「やっと終わったみたいだね」
村長「よし、一度村へ戻ろう。このまま居れば海流によって戻れ…」

レジアイス「とどめです。

かみなり」

全員「ハァ!!?」

その時、眩い光と全員の悲鳴がなり響いた…

守護神をゲットせよ！前編（後書き）

後書き

アイスとロックのキャラが酷い…

守護神をゲットせよ！後編（前書き）

ナオヤ「これも前編と同じく酷いな」

だって…前編は今まで一番長かったのに…投稿直前に消えたんだから…これも前、後書き消えたし…

コウタ「でも酷いのは変わりませんよね」

……（泣）

コウタ「では、後編スタート！酷いですが、こんな作者のために読んでやってください！お願いします！！」

ナオヤ「後、この小説に主人公最強設定が入る予定はありません」

守護神をゲットせよ！後編

コウタ達は、痺れながらも海流に乗って島へ戻ってきた。

コウタ「酷い目にあった…」
ユウヤ「あそこで雷を使うとは…」
メイ「本当に…あっ！コウタ！！あそこ！！」

メイが指差した先には、完全に気絶しているレジロックがいた。

村長「さぁ、早くモンスターボールを！」
コウタ「ええっ！？僕がですか！！？」
村長「いいから早く！」
コウタ「はっ、はい！！」

コウタは躊躇しながらも、レジロックにモンスターボールを投げた。
レジロックは赤い光に吸い込まれ、モンスターボールは揺れ始める。

そして、静止した。

コウタ「……レジロックまで…」
ナオヤ「すげぇ！！！じゃあレジアイスは俺がｇ」

レジアイス「そうは行きませんよ」

レジアイスが海から上がって来た。

レジアイス「私のマスターはそこの（グズで間抜け面のトンマである）少年…コウタ君だけです。私は残念ながら（うざそうで明らかに馬鹿と断言できるMの）あなたに捕まるつもりはありません」

コウタ、ナオヤ「……」

メイ「今さらっとヒドイ事いったわね……ナオヤについてはその通りだけど……」

ナオヤ「……」（泣）

コウタは泣き目になっているナオヤを無視し、レジアイスに向き直る。

コウタ「レジアイスさん」

レジアイス「はい、なんですか？」

コウタは真剣な顔でレジアイスに頭をさげ、

コウタ「ごめんなさい」

謝った。

レジアイス「……そんな事はいいです…早く掛かってきなさい」

コウタ「？？？」

レジアイス「ロックと鉄屑は運で捕まえられましたが、私はそうは行きませんよ（ぼっこぼっこにしてあげます、間抜け面の）コウタさん」

コウタは急いで首を横に振る。

コウタ「いや、だから僕は…」
レジアイス「やらないんですか？（早くぶちのめしたいんですが…）」

コウタは、レジアイスを捕まえたくないと言うのが顔に出ていた。

村長「コウタ！早く捕まえんか！！」
コウタ「だって…」

コウタの脳裏にさっきからのレジアイスの言動が浮かぶ。

コウタ（捕まえたらいつも一緒にいるんだよな…）

コウタはそんな事を考えていたが、

村長「ほら！こいつを受けとれ！！」

村長は、そんな事お構いなしにひとつのモンスターボールをコウタに投げ渡す。

コウタ「わっ！…これは……」

その中には、ジーランスが入っていた。

村長「こいつをやるから、早く捕まえんか！」

コウタ「は、はいっ！頼むよ、ジーランス！」

コウタがボールを投げると、中から光と共に、ジーランスが出て

きた。

ジーランス「……」
コウタ「……ジーランス？」
ジーランス「ＺＺＺ…」
コウタ「寝てるし…」

レジアイス「！！！……私の負けです」

レジアイスがジーランスを見た瞬間、負けを認めた。

全員「え…」
レジアイス「コウタさん、早く私を捕まえて下さい。さもないと…」

レジアイスはれいとうビームを構える。

コウタ「わかったわかった（汗）モンスターボール…」

コウタはこの急な展開を呑み込めぬまま、モンスターボールを投げるとレジアイスは何の抵抗もなく入り、やがてモンスターボールの振動も止まる。

コウタ「……」
ユウヤ「……」
ナオヤ「……」
メイ「……」
村長「……」

沈黙が続く。

コウタ「どういう事？」
村長「さぁ？」

５人は、その後村人に見つかるまで呆然と佇んでいた。

守護神をゲットせよ！後編（後書き）

後書き

レジロック「アイス、何でワザと捕まったんだ？」
レジアイス「…あのジーランスのレベルは…でした」
レジロック「まじか！？初心者用だろ！！？」（汗）
レジスチル「イマノワレワレノレベルハｓ」
レジロック「うるせぇ！！！のろいのろいのろいきあいパンチ！！！」
レジアイス「チャージビーム×６＋きあいだま」
レジスチル「グギァァァ！！！……キラン」↑星になりました。

ナオヤ「はっ！」

どうした？

ナオヤ「なんか…レジスチルの事が妙に心配だ…あいつは何故か他人とは思えない…」

ま、まぁそうだろうね…（苦笑）
それでは、今から１／２４まで、受験のため連載を休ませてもら

います。もしかすると休憩時間に感想の返事を書いたり、短いのを投稿するかもしれませんが、基本来ません。では、この辺で失礼しました。（礼）

旅立ち・1（前書き）

勉強の合間にちょこちょこ書いてました。（汗）

レジロック「にしては短かすぎだぁ！！ドレインパンチ！！！」

うわぁぁぁ！！！ち、力が抜けていく……バタッ

レジロック「ひ弱な奴だな。さて、こっちも…」

旅立ち・1

？？？「起きろやバカコラァ！！！」
コウタ「へブッ！」

コウタはいきなり、誰かに殴り飛ばされて目が覚めた。

コウタ「いてて…ここは…？」

コウタが周りを見渡すと、見慣れた自分の部屋が目に入った。
しかし、そこには明らかに場違いな人…いや、ポケモンが二匹…

レジロック「やっと起きたか。寝坊すけ」
レジアイス「おはようございます。（いつもながら間抜け面の）コウタさん。あの（単細胞短足の）パンチは痛かったてすか？（そうだったら幸いです）」
コウタ「……」

あまりの事に、コウタは放心状態に陥っていた。

レジロック「にしても、ポケセンってのはいいとこだな。一発回復だぜ！」
レジアイス「（間抜け面の）コウタさん、（馬鹿みたいに）ぼ～っとしてますが大丈夫ですか？」

コウタはこれが現実だと言う事をようやく理解し、
レジアイス（遅すぎですよ、のろま）
二匹に向かい合った。

コウタ「いくつか、質問良いですか？」
レジアイス、レジロック「「いいぜ　いいですよ」」
コウタ（ああ、いいんだ…）

ダメだと言われると思っていたコウタは少し驚くが、気をとりなおして言った。

コウタ「……なんでここにいる訳!?いつポケセンまで行った!?選らばれし者って、マスターって何!?そもそも決め方テキトーじゃない!?第一レジスチルはどこ!?それに何で君達はレジスチルに厳しい訳!?」

二匹は途中までは冷静に聞いていたが、なぜレジスチルに厳しいのかを聞かれた瞬間、目に見えて動揺した。

コウタ「???。レジスチルがどうかしたの!?」
レジアイス「スチル……あいつは……」
レジロック「コウタ…だったな?……他のは出来るだけ答える……だが、最後の質問だけは……答えられねぇ……答えたくねぇ……」

コウタが呆然とする中、二匹は肩を震わせる…人間なら「泣いている」という感じだった。

レジロック「少なくとも…俺達は……」
レジアイス「スチルを……信用していない……とでも言っておきます……あんな鉄屑なんか……」
コウタ「……（汗）」

予想外の暗い雰囲気になってしまい、困惑するコウタ。と、その

時、

お母さん「コウタ～皆来てるわよ～」

ユウヤ「お～い、コウタ！早く来いよ！」

下から、コウタのお母さんとユウヤの声がした。

旅立ち・1（後書き）

後書き

よし、終わりっと…

レジアイス「おや、（バカで間抜けでアホでヘタレの）作者さんじゃありませんか。今回は短いですね、チャージビーム」

アバババババババ痺れびれ～

レジアイス「特攻→のふぶき」

カキーン（色々な意味で一番酷いキャラだ、こいつ…）

レジアイス「何か言いましたか？ロックオン、

絶対零度」

ちょっま、それは君は覚えな…

レジアイス「特別です」

ギィャァァァァァァァァァァァ～～～～～～～～～～～！！！！！！！！！！！カチーン

レジアイス「次回もこれ位短いと思われますね。（このボケ）作者の（勝手な）都合で」

レジアイスの…性格を酷くし過ぎた…

レジアイス「絶対零度」

カチコチーン

旅立ち・2（前書き）

レジアイス「今回も短すぎますね」
レジロック「さて、どんなお仕置きがいいか…」
ちょっ…受験生にそれはないって…
レジアイス「絶対零度」
カチコチーン
レジロック「岩！石！砲！」
（ちゃかりス○ブラの大○空っぽいぞ！って）ギィャァァァ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！！！！！！……キラン☆
レジアイス「（屑）作者は星になりました」
レジロック「ついでに、絶対零度と岩石砲は作者にしか撃てねぇからな」

旅立ち・2

コウタ「今行く！ちょっと待ってて」

コウタは、ひとまず声をかけてきたお母さん達に返事をし、レジロックとレジアイスに向き直る。

コウタ「…つらい事があったのは分かったけど…ともかく今はボールに戻っててくれない？」

レジアイス「……わかりました」

レジロック「……わかったよ」

コウタは二匹をボールに戻し、机の上にあった二つのモンスターボールを取ってから（その中の一匹は気絶していたがコウタは気にせず）下のリビングへと向かった。

リビングには、コウタの予想通りナオヤとメイ、村長もいた。時計を見ると、もう１１：３０過ぎだ。

ナオヤ「おはよ！コウタ、眠れたか？」

コウタ「う、うん。（目覚めは最悪だったけどね…）」

コウタは少しはぐらかす。と、そこへ村長が話に入って来た。

村長「コウタ、もう旅立つ用意は出来ているか？」
コウタ「あ、はい。一応」

元々、ポケモンを貰ったらすぐに旅立つ予定だったので、荷物などは昨日用意して玄関においてあった。

村長「そうか、では今から旅立つんだな」
コウタ「はい、朝ご飯を食べたら、もう行きます（というより、時間的にもう昼か…）」
ユウヤ「それなら俺が、気球でカイナまで送ってくよ、どうせ用があるし」

ユウヤが話に入って来た。

メイ「いいんですか！？やったー！」

メイは跳び上がって喜ぶ。

コウタ（こうゆうところは女の子だなぁ）
ナオヤ（こうゆうところだけは女の子だな、何時もとは大違いだ）

二人はそれを見て、ほとんど同じ様な感想を抱いたが、

メイ「ナオヤ～、こっちにこようね～」（怒）

……メイには聞こえたようだ。

ナオヤ「ヒィ～～～……お許しを～」

と、そこへ

ユウヤ「メイ、そのくらいにしておけ。もう行くぞ」

ユウヤがメイを止めた。

ナオヤ「兄貴～ありが…」

ユウヤ「その代わり、気球の中でしていいから」

メイ「はい♪」

ナオヤ「……」（兄貴に期待した俺がバカだった……泣）

ナオヤはもう、半ば人生に絶望していた。

旅立ち・2（後書き）

後書き

くっ…アイスにロックは調子に乗って…こうなったら、まだまだあいつらの古傷をつついて…

レジアイス「絶対零度」

レジロック「岩！石！砲！！！」

……キラン☆↑叫ぶ間もなく星になった。

旅立ち・3（前書き）

レジアイス「……」
レジロック「……」
あの～どうかしました？
レジアイス「…酷いほどに短い…」
レジロック「これは…無いだろ…もうちょっと書いてから投稿しろよ…」
だって…流石にこれ以上ＤＳ持ってたらヤバイでしょ…受験生だし…
レジアイス「この『旅立ち』シリーズの出来も最低最悪」
レジロック「一度、懲らしめる必要があるな」
ややや止めて下さい……
レジアイス「問答無用です。めいそう×無限大」
レジロック「お前に全てをぶつけてやる。つるぎのまい×無限大」
ちょっ…何でそんな技が使える訳…
レジアイス、レジロック「作者だけに特別です（だ！）」
このチート共がぁぁ～～～～～～！！！！！！！！！！↑ヤケクソ
レジアイス「残念、作者にしか使えないので本編には関係ありませんよ」
そういう意味じゃなくて……
コウタ「では、本当に本当の今年最後の１話、どうぞ！！！」
スルーか……

旅立ち・3

ユウヤ「気球の準備できたぞ～！」

ユウヤの目の前には、浮かび上がる用意の出来ている気球と、それに繋がれたペリッパーがいた。

メイ「空の旅、楽しみね。ナオヤ♪」（黒笑）

ナオヤ「……」（冷や汗＋大泣）

メイとナオヤも仲良くしている。ちょっとナオヤが縛られていたりするが。

コウタ（カイナに着いたら…よし、僕ならできる！）

コウタは心の中で何かを決心していた。

村長（そういえば…なぜレジアイスはＬｖ２０前後のジーランスに負けを認めたんだ？）

見送りに来ていた村長が自分が疑問に思っている事を考えている間に、

ユウヤ「皆、乗り込め！」

コウタ、メイ「お～！」

ナオヤ「…お～…」

お母さん「行ってらっしゃ～い」

全員元気よく乗り込み、気球は飛びたった。

メイ「さて、ナオヤ、紐無しバンジーとパラシュート無しスカイダイビングどっちがいい？」

気球がある程度飛び上がった後、メイがナオヤに聞く。

ナオヤ「……」

その後、気球の中で何が合ったのかは、その場に居た者しか知らない。勿論、誰も語ろうとはしなかった。ひとつ言える事は、その後ナオヤが「あれ？俺って生きてるの？マジで！？」と本当に不思議そうな顔で言っていた事だけだ。

そして一行は、カイナシティに到着する。

旅立ち・3（後書き）

後書き

レジアイス「絶対零度」
レジロック「岩！！！石！！！砲！！！！！！」

…キラーン★↑この世の果てまで飛んでった。

コウタ「ん？置き手紙が…『これからマジに執筆休みます。後、【受験だから休みます】という前、後書きは１／２４に消しておきます』だって」
リョウヤ「という事で読者の皆、来年の一発目は俺達だぜ！」
ハヤト「もうそん時にはあけおめの時期、とっくに過ぎてるだろうな」
コウタ「執筆再開は１／２４ですので、早ければすぐ投稿します！来年もよろしくお願いします！！」

＊もうひとつの出会い＊（前書き）

もうだめだ！！！僕の勉強しないといけないという理性は書きたいという欲望に勝てなかった！！！ということで投稿です！！！

コウタ「決意弱っ！！？」

ナオヤ「しかも俺達の出番は？」

後3、4程無し！！！

コウタ、ナオヤ「……」

ではっ！！！本編スタート！！！

＊もうひとつの出会い＊

コウタ達が村から旅立った頃…
ヒマワキシティとミナモシティを繋ぐ１２０番道路。沢山の背の高い草が鬱蒼と生えるこの場所で、あの７人のトレーナー…ミスト達が昼食の用意をしていた。周りの草は刈り取られている。
リョウヤ「じゃ、そろそろ水汲みにでも行ってきますか」
ハヤト「俺も魚でも採りに行くか」
ブイマル「おう、行ってこい！飯は俺とヒカルに任せろ！てことで俺は飯炊くか」
ヒカル「じゃあ、僕はスープでも作りますよ」

その会話の後、リョウヤとハヤトは近くの川へと向かって行った。

１２１番道路、送り火山近くの水道
此処に先程出発した二人の姿があった。

リョウヤ「よし、ロトム！ウォッシュロトムだ！！」
ハヤト「ルカリオ！行け！！」
ロトム「トム～」
ルカリオ「リオッ！」

二人は芝刈機の姿をしたポケモン、カットロトムと、ルカリオを繰り出した。ロトムはすぐさま、リョウヤの持って来ていた小型の洗濯機に乗り移り、ウォッシュロトムになる。

リョウヤ「ロトム、いつもの通りだ」
ロトム「ロトッ！」
ハヤト「ルカリオもだ！」
ルカリオ「オッ！」

ロトムは尻尾の様な管で水を吸い込み、ルカリオはサイコキネシスで魚を採る。
ある程度採った時、リョウヤが何かに気づいた。

リョウヤ「ん？何だ、あれは？」
ハヤト「え？どれだ？」
リョウヤ「ほら、川の反対側の岸辺」

リョウヤが指差した先には、何やら黒い何かが倒れていた。

ハヤト「あれは…ポケモンか？」
リョウヤ「さぁ？」
ハヤト「ともかく取ってみるか。ルカリオ、サイコキネシス！」

しかし、それは動く気配がしない。

リョウヤ「悪タイプのポケモンか？」
ハヤト「みたいだな」
リョウヤ「となると…こいつで、ラグラージ！！」
ラグラージ「ラ～ジ！」

出てきたラグラージは、バトルと思い威嚇の雄叫びをあげる。

リョウヤ「ラグラージ、あそこのポケモンを連れて来てくれ」

ラグラージ「ラ…ラグ！」

ラグラージはバトルではないと知ると少し落胆したが、すぐに立ち直ると川に飛び込みその黒いポケモンを抱えて戻って来た。

リョウヤ「こいつは…まさか！？」

ハヤト「こいつと生きている内に会えるとはな…」

そのポケモンを見た2人は驚愕する。

ハヤト「ひとまずブイマル達の所に戻ろう」

リョウヤ「嗚呼、そうだな」

2人とロトム、ルカリオ、黒いポケモンを抱えたラグラージはもと来た道へと戻って行った。

ブイマル「お、2人共遅かったな…ん？ラグラージ、何だそれは？」

リョウヤ達が戻ってくると、何時もどうりご飯を炊いていたブイ

マルが、2人と3匹の連れてきたポケモンに気付いた。ついでに、ヒカルは結構な大きさの鍋でコンソメスープを作っており、シュウとマサヤはこれまた何時もどうりバトルしていた。

リョウヤ「おう、実はな…」
マサヤ「つばめがえし☆」
ハヤト「川に行ったら…」
シュウ「シャドーボールＤＡ！！！」
リョウヤ「川の向こう岸に…」
マサヤ「マジカルリーフ☆」
ハヤト「こいつが倒れてて…」
シュウ「れんごくでうち落とＳＥ！！！」
リョウヤ「それで俺のラグラージで…」
マサヤ「にほんばれ☆から☆ソーラービーム☆」
ハヤト「助けたって訳だ」
シュウ「オーバーヒートで受け止めＲＯ！！！」
ハヤト、リョウヤ、ブイマル「「「うるせぇ！！！」」」（激怒）

3人は怒鳴ると同時にポケモンを出し、マサヤのトロピウスとシュウのシャンデラに攻撃を加える。

リョウヤ「ほのおのまい！！！」
ハヤト「ナイトバースト！！！」
ブイマル「ギアソーサー！！！」

3人のポケモンであるウルガモス、ゾロアーク、ギギギアルの技が決まる。

トロピウス「ピウッ！？」
シャンデラ「デラッ！？」

2匹は横からの急な攻撃に反応しきれずに技は直撃、気絶してしまった。

マサヤ「トロピウス！！？」
シュウ「シャンデラ！！？」

2人はそれぞれ自分のポケモンに駆け寄る。

シュウ「なにするん…」
ブイマル「お前らがいつもいつも食事の準備もせず！更には人の話まで邪魔するからだよ！！」（激怒）
リョウヤ「しばらく大人しくしてろ！シュウ！！お前はもう立派な18だろ！マサヤ！！弟だからって容赦はしないからな、何かを期待した目で見るな！！！」（激怒）
マサヤ「ううう…」

ブイマルとリョウヤに説教され、反省する2人…

シュウ「乱入するなら相手するからYO！！！」

いや、反省したのはマサヤだけであった。

ハヤト「調子のんなよてめぇ！！！」（激怒）

ハヤトが暴言を放ち、モンスターボールを構える。

ヒカル「ちょっと皆さん、落ち着いて下さい！今はこのポケモンの傷を治療するのが先でしょう！！」

鍋の火と、ご飯を炊いていた焚き火の火を消してきたヒカルが皆に、本来の目的を思い出させた。

ブイマル「そうだな、だが今はコレしかない。『いい傷薬』」
リョウヤ「無いよりましだろ」

ヒカルに言われ、落ち着いたブイマル達が黒いポケモンに薬を付けようとした時、

シュウ「おいおい！！バトルしないのＫＡＩ！！！」
ヒカル「行け！ダイノーズ、じゅうりょく！！」
シュウ「ぐばっ」

まだ空気を読めていないシュウは、ヒカルの繰り出したダイノーズの重力により、倒れた。

シュウ「おい！一体何が…」

ヒカル「でんじは！！！」
シュウ「アバババ」

後ろでシュウが痺れている間に、ブイマルが黒いポケモンにいい傷薬を使い、ある程度の傷を治す。その後、七人はポケモンをボールに戻した。（シュウのポケモンはヒカルが戻しておいた）

黒いポケモン「う…う…ん……此処は…」
ブイマル「おう、目を覚ましたか」
リョウヤ「此処は１２０番ど…ん？」
ハヤト「おい、今こいつ…」
マサヤ「喋ったな☆」

ヒカル「どういう…事ですか？」
ミスト「……」

６人はあまりの事に絶句する。

黒いポケモン（俺は…確か…デオキシスと戦ってて…！あ、思い出したぞ！！！くそっあいつ…調子乗りあがって…あんのくそ野郎ぅぅぅ～～～～～～～～！！！！！！！！）

…もう皆さんはお分かりであろうが、この黒いポケモンはミナモ沖でデオキシスに敗れた……ダークライである。

シュウ「まぁ、相手は人知を越えた伝説のポケモンＤＡ！！！人の言葉を操ってもなんら不思議はないＺＥ！！！」
６人「！！？」

いつの間にか復活していたシュウの言葉に、６人は更に驚く。

リョウヤ「え…まさか…そんなはず…」
ハヤト「そうだな…まさか…」

6人「シュウ（さん☆）（先輩）がまともな事を言うなんて！！？」

シュウ「そっちＫＡＩ！！？」

負けじとシュウがつっこむ。

ブイマル「まぁ、ダークライに会えたというのは凄いな。リョウヤ、ハヤト」

ダークライ「何故…俺の事を知っている？（ああっもう！！！早いとこ傷を癒してデオキシスにリベンジしてぇんだよ！！！だからほっといてくれよ！！！）」

またも心の中で悪態をつくダークライ。

ミスト「……古い…文献に…記録が残っている……」

ダークライ「…そうか…（あれ～、俺ってそんな人の前に出たっけ？そりゃ少しは表した事はあるが…それか？）」

ダークライが記憶を辿っていたその時、

ズドォォォン！！！

全員「！！！？？」

大きな爆発音と共に、大量のエネルギー弾が飛んできた。

ヒカル「何だ！！？」

全員が空を見上げると、そこに居たのは…

以前デオキシスが放った、デオキシス自身の影だった。

ダークライ「デオキシス…しかも分身…ディバイトか!!?（もう俺の居場所が割れただと!!?あいつめ…余計な事をするなぁぁぁ〜〜〜〜〜〜!!!!!!!!!）」

ダークライはいつまで素を隠しきれるのだろうか…

リョウヤ「へぇ、伝説のポケモン、デオキシスの分身か…ディバイトねぇ」

ハヤト「また伝説のポケモン…流石は分身、数が多いな、ざっと１００…２、３０ってとこか」

ヒカル「全員が全ての手持ちを出したとして…一匹３、４匹倒せば良いですね」

ブイマル「楽勝だな」

余裕を見せる7人。

ダークライ「（何ぃ!!?あいつらは本体まではないが結構強いぞ!!?それを一匹で3、４体?無理にきまってらぁ!!!）待て、あいつらはただのポケモンじゃ…」

マサヤ「ないんでしょ☆大丈夫☆大丈夫☆」
シュウ「俺達の相手じゃないＺＥ！！！」
ミスト「……行くぞ……」

ミストの言葉に、７人はモンスターボールを六つ全て構える。

ダークライ「おい、本当にあいつらは…」
ハヤト「心配すんなって。さて、行くか！！！
サザンドラ！
ルカリオ！
ゾロアーク！
デスカーン！
ドンカラス！
アブソル！」

リョウヤ「覚悟しろよ、お前ら！！！
ラグラージ！
ロトム！
ウルガモス！
トゲキッス！
ツボツボ！
ヌケニン！」

ヒカル「その程度なら負けませんよ！！！
ライチュウ！
エレキブル！
ダイノーズ！
アギルダー！
ムクホーク！
シビルドン！」

マサヤ「ぶっ飛ばしてやりますよ☆！！！
メガニウム！
ドリュウズ！
トロピウス！
ジュカイン！
キングドラ！
ジュペッタ！」

シュウ「ウズウズするＺＥ！！！やるＫＡ！！！
ゴウカザル！
メタグロス！
シャンデラ！
リザードン！
エアームド！
ドータクン！」

ブイマル「俺達をなめんなよ！！！ぶっ潰せ！！！
イーブイ！
ギギギアル！
ヨノワール！
ハピナス！
グライオン！
ミロカロス！」

ミスト「……行くぞ……！お前達！！！
メタモン！
テッカニン！
フリージオ！
ドーブル！

デンチュラ！
エルレイド！」

7人の…全42匹のポケモンが、一斉に戦いへの雄叫びを挙げる

……

そして、とうとう出会った…7人と一匹。もうひとつの出会いが
…運命を更に大きく動かす……

＊もうひとつの出会い＊（後書き）

後書き

さてさて、これからしばらくはかなり重要な話になりますよ～

レジアイス「どうせ駄文ですけどね」

……（泣）

リョウヤ「てか、然り気無く俺とマサヤが兄弟っつう設定でたな」

マサヤ「無理矢理感☆満載☆ですけどね☆」

……（大泣）

ハヤト「俺達の手持ちポケモン……だいぶタイプが片寄ってる奴がいるぞ」（汗）

だってリアルの君達がそういったからでしょ。リアルマサヤなんか「草の御三家全部＋トロピウス」とか言ってたし、まだ出てないけどある奴は「グラードンとサンダーとミュウツーと……」とか言い出したし！！！伝説は駄目って言ったのに！！！

ブイマル「どうでもいいな」

断言しなくても……

7人「それでは読者の皆さん、感想、評価の方、宜しくお願いし

ます。」（礼）

あ、言ってくれてありがとう。

リョウヤ「お前にまかせるのは心配だ」

……

＊最速の閃光＊（前書き）

今日の塾が実力テストで終わった後休憩と称して書きました！！！

コウタ「手応えはあったらしいよ」

それから、今回ぶっ飛び設定が出るかもしれません。

コウタ「もう自分の知人の名前をモジってキャラにしてる君が今更何を言う、性格も似たような感じにしてるし」（汗）

大丈夫、本人に許可取ってるから（笑）

それでは、本編どうぞ！！！

＊最速の閃光＊

ヒマワキシティとミナモシティを繋ぐ１２０番道路、此処で今、大規模なバトル…いや、戦闘が行われていた。

７人は、１人１人で６匹の手持ちに指示していると言うのに、ちゃんとポケモン達に的確な指示を出している。

ここで、ミストがデオキシス・ディバイトの一瞬の隙を付いて６人に目配せし、７人同時に技を繰り出した。

ヒカル「ダイノーズ、じゅうりょく！」

ミスト「ドーブル、ワイドガード、メタモン、ラグラージにへんしん」

ハヤト「ルカリオ！」

リョウヤ「ラグラージ、ツボツボ！」

マサヤ「メガニウム☆ドリュウズ☆トロピウス☆ジュカイン☆！」

シュウ「ゴウカザル、ドータクン、リザードン、メタグロス！」

ブイマル「グライオン、ヨノワール！」

ミスト「エルレイド、メタモン！」

ヒカル「エレキブル、ダイノーズ！」

全員「じしん！！！」

相手の隙をつき放たれた七人のコンビネーション、単純なだけに強力な１７匹分の地震コンボに耐えられるはずがなく、デオキシス・ディバイトは全滅した。かかった時間は僅か１０分程である。

ダークライ「……（呆気な！！！て言うか今の人間とそのポケモンってのはそんなに強えのか！！？たしかにアイツらは分身だから弱いんだが、あれは早すぎだ！！！…待てよ、こいつらに手伝っ

て貰えば…いや、信用できるのか!!?だが、今のままでは…くっ…俺は、俺は、どうすればいいんだぁぁぁぁぁぁ～～～～～～！！！！！！！！）」

ダークライの心の叫びも、まもなく出てきそうである。

リョウヤ「弱かったな、いくら伝説ったってこれじゃあな」

ハヤト「全くだ」

？？？「そうか…では、本物はどうだ!!!サイコブースト!!!」

戦闘が終わり七人が肩の力を抜いた瞬間、突如念の力を込めた光球が落とされた。

ブイマル「ハピナス、まもる!」

ハピナス「ハッピッ!!」

咄嗟にブイマルがハピナスにまもるを指示し、サイコブーストを防ぐ。

ヒカル「何だ!?」

7人とダークライが再度、空を見上げると

デオキシス「また会ったな、ダークライ」

デオキシスが浮かんでいた。

ダークライ「…デオキシス…もう本体が…（ちいっ！来るの早ぇぞ！！！彼奴は分身とは格が違う…幾らディバイトを簡単に倒したからって人間と普通のポケモンで対抗できるか…くそっ！！！俺の体が動けば…ちっくしょおぉぉぉぉぉ～～～～～～！！！！！！！）」

怪我が完治していない事を恨むダークライ。

リョウヤ「じゃあ…誰があいつと戦うか？」

シュウ「俺がやりたいＺＥ！！！」

マサヤ「僕がやります☆！！！」

ブイマル「俺がやらずに誰がやるんだ！！！」

ハヤト「争ってもしょうがないだろ、ここは間を取って俺で」

シュウ、マサヤ、ブイマル「何故そうなる！！？」

デオキシス、ダークライ「こいつらは俺を（あいつを）舐めているのか！！？」（怒）＆ａｍｐ；（汗）

下らない事で争う４人に対し、同時にデオキシスは怒り、ダークライは焦る。

ヒカル「待って下さい、皆さん！！！ここは皆で…」

ダークライ「（そうだ…大体彼奴に一人で挑もうなど無謀すぎる…万全な状態の俺でさえ互角なのに…）」

慌てたダークライはヒカルの言葉に一度落ち着き、その意見に賛同し…

ヒカル「ジャンケンでもして決めましょう！！！」

ダークライ、デオキシス「！！！？？」

ようとしたが、その続きを聞いて愕然とする。

ダークライ「（待て待て待て！！…嘘だろ！！！？）」

デオキシス「やっぱり俺を舐めてやがる…」（激怒）

２匹の考えなど露知らず、７人はジャンケンを始めてしまった。

何回かのあいこの後、勝ったのは…

ヒカル「やった！」

ブイマル「ちっ…」

ヒカルであった。

ヒカル「じゃあ行きますよ、まずは戻れ！」

ダークライ、デオキシス「え！！！？？」

敵同士である筈の２匹の声がまたハモる。それもその筈、ヒカルはライチュウ以外の全てのポケモンをボールに戻したのだ。ヒカル以外の６人は全ての手持ちをボールに戻す。

デオキシス「お前…！？」

ヒカル「1対1…これで互角ですね」
デオキシス「ふざけるな!!!俺をそんな人間の普通のポケモン等と同じにするな!!!」（激怒）
ヒカル「同じかどうかは戦えば分かりますよ」
デオキシス「てめぇ!!!やってやろうじゃんか、速攻で決めてやる!!!」

ヒカルの挑発に乗ったデオキシスはその身をスピードフォルムへと変化させる。

デオキシス「くらえ!!!しんそく!!!」

デオキシスが物凄い速さ…神速と言えるスピードでライチュウに突っ込…

ライチュウ「ライ！」

めなかった。

デオキシス「な…」

ダークライ「何だと！！？」

ライチュウはデオキシスのしんそくを越える素早さで突撃をかわし、１０万ボルトを浴びせる。

デオキシス「ぐばっ…」

ヒカル「今だ！ダークテール！！」

ダークライ、デオキシス「な！！？」

２人は3度、声がシンクロする。何故なら、ヒカルが聞いた事もない技をライチュウに指示したのだ。

ライチュウ「ライチュ～ウ、ライ！！」

闇の様な物を纏った尾が、デオキシスを襲う。

デオキシス「がは…何なんだ……コイツは……」

こちらは他人事の様に戦いを見物する6人。

リョウヤ「いや～、ヒカルも手を抜かないな。いや、相手が伝説のポケモンだから当然か」

ハヤト「オリ技炸裂ってとこだな」

マサヤ「レベルは☆デオキシスの方が☆上っぽいけど☆ライチュウも負けてないですね☆」

ダークライ「オリ技？レベル？？」

長い人生（ポケ）の中でも聞いた事のない単語の連続でダークライは混乱していた。

シュウ「ダークライはオリ技とレベルの事を知らないのＫＡＩ！！！」

ダークライ「何なんだ？？それは？？？」

ブイマル「それなら俺が教えてやるよ」

ブイマルが得意そうに話す。伝説のポケモンが分からない事を自分が知っているので鼻が高くなっている様子。

ブイマル「オリ技ってのはオリジナルの技、要するに自分達で作った自分だけの技だ。今のヒカルのダークテールはふいうちとアイアンテールの複合技だな。で、レベルはそのまんまポケモンの力量（レベル）だ。俺達人間にはまだ詳しく分からないけど、ポケモンのレベルには制限が無いらしく無限にあがると予測されている。ま、その数値も人間の基準だがな。今の確認されている中で最高レベルは今まで開催された全１４回、常にＷＣＲの上位にいる３人の切り札、もう上がらないとも言われているレベル……Ｌｖ３３６だ。ついでに俺達のポケモンは、万全な時に大体Ｌｖ２２０～２９０位だな」

ダークライ「レベル……ポケモンの力量……ＷＣＲ？？？」

ブイマル「簡単に言えば誰が最強の称号……ポケモンマスターなのかを決める大会さ。まぁ、最近は殆どさっき言った３人だけで争ってる状態だがな」

ダークライ「……（いつの間に人間はこんなにも発展したのだ……もしかすると……コイツらが信用出来るのなら、或いはそういう手も……）」

さて、ヒカルＶＳデオキシスの戦いは……

ヒカル「でんこうせっか！」
ライチュウ「ライライ！！」

ヒカルの優勢だった。
そもそも、アタックフォルムとスピードフォルムで攻めて攻めて、攻撃が来たらディフェンスフォルムになりまもるを使う。そんな単調な戦略が臨機応変に戦うヒカルに通じるはずもなく、

デオキシス「まもる」
ヒカル「フェイント！！」

デオキシスのダメージは蓄積していく一方だった。

デオキシス「ぐ……俺が……こんなやつに劣勢だと！！？……ならば！」

デオキシスはアタックフォルムになると、自分の正面に巨大な念の球を造り出す。それは先程、不意打ちをした一撃と同じ技の様であったが大きさが格段に大きくなっていた。

ヒカル「へぇ、それが君の切り札か……じゃあ僕も切り札、見せちゃおっか」
ライチュウ「ライ！！！」

シュウ「ヒカルが切り札を使うらしいＺＥ！！！」
ミスト「……ハヤト……」
ハヤト「はいはい、分かってますよ。行け、デスカーン！！！」

ハヤトはミストに言われ、ボールからデスカーンを出す。

ハヤト「デスカーン、シャドーベール！！！」
デスカーン「カ～ン」
ダークライ「また……知らない技……」

デスカーンは自分の影の様な手の形を平べったく変え、自分とダークライ、ハヤト達を包み込んだ。

ハヤト「ヒカル、ライチュウ、思いっきりやって良いぞ」
ヒカル「はい！！！行くぞライチュウ！！！」
ライチュウ「ライ！！！」

ヒカル「ギガルクスフラッシュ！！！」

ライチュウ「ラ～イ～ッチュゥ～～～ウ！！！」

デオキシス「！！！？？」

ヒカルが技の名前を叫ぶと共に、ライチュウを中心に眩い光が拡がって行った。それは技の名の如く、十億（ギガ）ルクスの明るさを持つ閃光（フラッシュ）だった。

ダークライ「これは……」

デスカーンの腕の中は真っ暗な空間の筈が、ギガルクスフラッシュが放たれた瞬間一瞬だけ光に包まれた。

リョウヤ「これがヒカルの切り札、ギガルクスフラッシュだ。その名の通り、１０億Ｌｘもの明るさの光を相手に浴びせる技。あ、

後Ｌｘって言うのは明るさの単位の事」

ダークライ「それで……どうなるんだ？」

中々意味を理解しないダークライにハヤトが補足を入れる。

ハヤト「太陽の光を地球上から直接見ると約１３万Ｌｘの光を見る事になる。その約８０００倍の光を直接見ると……どうなると思うか？」

ダークライ「眩しいな」

ハヤト「それですむと思うのか？」

ダークライ「？」

ハヤト「人間なら失明の危険も有り、ポケモンでもしばらくは完全に視力を失う」

ダークライ「なっ……」

ハヤト「さぁて、始まるぞ。ヒカルの苛めが」

ハヤトはデスカーンにシャドーベールを解除させ、ヒカルの戦いの傍観を再開した。

デオキシス「こ…これは……目が……開かない……何も見えない……」

デオキシスはそのあまりの眩さに視力を一時的に失い、サイコブーストを中断した。

ヒカル「チャンスだよ、ライチュウ！！ライジングダークテールラッシュ！！！」

ライチュウ「ライチュ～ウ、ライ！！！」

ライチュウは動きの止まった所を狙い、ダークテールを使ってデオキシスを上に跳ね飛ばし、更にひかりのかべを足場にしてジグザグに尾で打ち上げて行く。

デオキシス「ぐぅ…」

ヒカル「行けぇぇぇ！！！」

ライチュウ「チュウゥゥ！！！」

ライチュウは止めとも言わんばかりに、縦回転をかけたシャドーテールを地面に向かってデオキシスに打ち付けた。

それらの攻撃は、全て胸の核に確実に当てており、目の見えないデオキシスは抵抗出来ずに受けている途中で気絶した。

デオキシスは地面に向かい、物凄い勢いで落下して行く。

ブイマル「ヒカルの勝ちだな」
マサヤ「意外と☆呆気なかった☆ですね☆」
シュウ「これで大丈夫だZE！！！ダークライ！！！」
ダークライ「す…凄い…（本当になんなんだ！！？コイツらは！！？もしかしたら俺より強えんじゃねえのか！！？更にコイツらより強い人間とポケモンがいる……信用出来るのなら……）」
7人とダークライが勝利を確信した時、皆の目に突然翠色の龍が飛び込みデオキシスを受け止めた。

＊最速の閃光＊（後書き）

後書き

リョウヤ「駄文」

ハヤト「終わり方中途半端」

ブイマル「設定ぶっ飛び過ぎ」

そうかな？ポケモンと言う者は無限の可能性を持っている。だからＬｖも覚えられる技も無限大と言う訳。（この世界では）
一応、公式リーグや大会では技の数を制限するルールがある事にしてるから。↑リョウヤとハヤトはスルー

ヒカル「ＷＣＲの常に上位って…しかも最近は毎年ＴＯＰ３を３人で独占、絶対にチート的強さを持ってますよね」

リョウヤ「見る限りチートに近いヒカルより強い俺やブイマル、ミストでも互角～手も足も出ないチャンピオン四天王フロンティアブレーン」

大丈夫、チートは出さない！！！（ジンダイ基準）

ブイマル「お前の基準が怪しい」

マサヤ「正直☆心配☆ですね☆」

だから大丈夫って♪

7人「絶対大丈夫じゃない（ＺＥ！！！）（ですね（☆））」

断言しなくても……

リョウヤ「それにもう少し伝説のポケモンには威厳を持たせろよ、俺達に負けてるようじゃ駄目だぜ」

そこの所は大丈夫！！！伝説のポケモンは強さも個性も物凄いから。

ミスト「……本当だな？」

勿論！！！

ヒカル「レベルはどのくらいですか？」

それはまた後で。ともかく強いと言っておくよ。

ハヤト「なんだか心配だな」（汗）

だから大丈夫って！

それでは、感想や評価、お待ちしています！！！

シュウ「感想の返信も頑張ってするらしいＺＥ！！！だから宜しくＮＡ！！！」

＊戦いを止めんとする者達＊（前書き）

今日から三学期という受験に取ってもっとも大切な時期、更に僕は後2週間で本番という（ｒｙ

コウタ「で、結局書いたと」

はい、同じ高校を受けるメンバー3人で学校終了後一緒に。伝書鳩リネロサースディ（リアルナオヤ）もいましたよ。

コウタ「それはどうでもいいから」

はい……すみませんでした！！！↑土下座

コウタ「あやまらなくてもいいよ、自分が不幸になるだけだから」

……ｏｒｚ

コウタ「では、本編の方お楽しみ下さい」

＊戦いを止めんとする者達＊

ミスト「これは……」
ブイマル「…今日は物凄い日だな……3匹もの伝説のポケモンに会えるなんて……」

落下していたデオキシスを受け止めたのは……空を司る翠の龍、天空の覇者、レックウザだった。
デオキシスは受け止められた時の衝撃で目を覚ます。

デオキシス「うっ…レックウザ？」
レックウザ「デオキシス……まだ他の奴等と戦う時ではないと言っただろう。なのに何だ、この有り様は」
デオキシス「……だが、ダークライが……」
レックウザ「反対派か……あいつらを潰すのはまた後だ。今から戻るぞ、全員収集だ。皆はもう来ている」
デオキシス「全員収集！？」

デオキシスはレックウザの言葉にかなり驚いている。

ハヤト「皆……まだ伝説のポケモンがいるのか……」
リョウヤ「こんな事が……一体何が起こっているんだ？」

今までの日常とは違う……何かが起こり始めている……7人はそう思い始めていた。

デオキシス「……何があった？」
レックウザ「イッシュの三竜が……ゼクロム、レシラム、キュレムが……アルセウス達の方に着いた」

デオキシス「な……」
ブイマル「もう何が何だか分からねぇ……」

レックウザが放った言葉に、その場に居た全員が言葉を失った。

シュウ「また出ＴＡ！！！伝説の、憧れのポケモンがガンガンでるＹＯ！！！イェイ！！！」

……1人を除いて全員が言葉を失った。

ダークライ「まさか……そんなことが……（何だと！！？じゃあいつらは大丈夫か！！？イッシュの仲間が心配だ……何とか無事でいてくれぇぇぇ！！！）」

ダークライは心の内で仲間の身を案じる。

レックウザ「戻るぞ、デオキシス」
デオキシス「ちっ…覚えてろよ！お前ら！！」

デオキシスはじこさいせいで自分の傷を癒し、レックウザと共に飛び差って行った。

その場に残された7人と3匹。ヒカルとハヤトはひとまずライチュウとデスカーンをボールに戻す。

リョウヤ「……何が起こっているのか説明してくれないか、ダークライ」

ダークライ「……（このことは人間に広がると騒ぎになる……やはり言うべきではないか……）すまんが、それは言えな……」

？？？「ライ、大丈夫♪彼等は信用できそうだよ♪」

急にどこからか陽気な声が聞こえてきた。

ダークライ「（まさか！！？この声は！！？）」

ブイマル「誰だ！？どこにいる！！？」

？？？「第一人間も関係あるのに話さないのは無責任じゃないのかな♪ねぇ、君達も何が起こっているのか知りたいよね♪ライを助けてくれた人間達♪」

ミスト「……どこにいる……？」

？？？「ここだよ♪」

皆が謎の声がする方を見ると……

ヒカル「僕が作ったスープ？」

ヒカルの作っていたスープの鍋から声がしていた。

？？？「スープじゃなくて中♪ほらっ♪」

声と共に突然、鍋から鋭い角をもつ四足の緑色をしたポケモンが飛び出して来た。

ダークライ「ビリジオン……（良かったぁぁぁ！！！無事だったんだぁぁぁぁぁ！！！！！うっしゃあっ！！！）」

ダークライは仲間の登場に、心の内で歓声を上げる。

ミスト「……ビリジオン……！？」
マサヤ「また……出ましたね☆」

ダークライは、鍋から飛び出して来たポケモン……ビリジオンに気になって仕方がなかった事を聞いた。

ダークライ「ビリジオン……後の2人は……無事なのか？（頼む！！どうか無事だと言ってくれ！！！）」

ダークライは心の内でビリジオンに祈る。

ビリジオン「うん、無事だよ♪今は反転世界にいるから♪」
ダークライ「そうか……良かった……本っ当に、良かったぁぁぁぁぁ！！！！！！うおっしいぃぃやぁぁぁ！！！！！！！！」
（ガッツポーズ）

ミスト「……？」
シュウ「どうしたんだＹＯ？急に叫んＤＥ！！？」
ビリジオン「フフフ♪」

ダークライ「あ……」（汗）

ダークライの素がとうとう出てしまった。

ダークライ「あ……いや……その……違うんだ、今のは思わず……」
ビリジオン「本当の自分が出ちゃた、でしょ♪」

ビリジオンがダークライに詰め寄って来た。

ダークライ「いやそうではなくつい……」
ビリジオン「言い訳しなくて良いよ♪格好つけなくても良いじゃん、ライには可愛い所がいっぱいあるんだし♪中途半端な熱血で優柔不断な所とか♪」
ダークライ「俺の話を……」

しかしビリジオンは、ニヤニヤしながら更に詰め寄る。

ビリジオン「君はもう自分に嘘をつかない♪正直になればいいじゃん♪」
ダークライ「本当に止めてくれ……」
ビリジオン「ふ～ん。じゃあ、『あれ』の事を言っていいんだ♪」
ダークライ「何！！？」

ビリジオンが『あれ』と言った途端、ダークライは慌て始めた。

ダークライ「あわわややめろよびびビリジじじオンさちちょ……あれは言わないやや約束じゃ……」
ビリジオン「僕は別に言って良いんだよ？」
ダークライ「そそ……んな……」（泣）

ダークライが涙目になって訴えても、ビリジオンはニヤニヤするだけだ。

ハヤト「う～ん……何て言うか……」
リョウヤ「伝説のポケモンってもっと威厳があると思ってたな」
ブイマル「駄目だ……ダークライがどうしてもダメダメな奴にしか見えない……」

ダークライがもう泣き出しそうになったその時、

？？？２「ふざけすぎだぞ、ビリジオン」
？？？３「全くだ……」
？？？４「いつもいつも呆れるでごわす」

再び声が聞こえて来た……

ヒカル「何故に？」

スープの鍋から。

そしてそこから、ポケモンが３匹飛び出して来た。ミュウツーとビリジオンと同じ様に鋭い角を持つ２匹の蒼と茶色のポケモン……コバルオン、テラキオン。

ヒカル「僕は伝説のポケモンが出てくるスープなんて作った覚えは無いけど……」（汗）

ビリジオン「あ♪バルにラキにウツー♪」
ミュウツー「その呼び方はやめろ」（怒）
ダークライ「（ウツーｗｗ）」
ミュウツー「……ダークライ、お前が考えてる事が分かるのは気のせいか？」（怒）

ミュウツーはダークライの考えている事にかんずいた。

ダークライ「気のせ……「はどうだん」おいっ！！！」

ダークライはミュウツーのはどうだんを受け、吹っ飛んだ。

ビリジオン「あらあら♪」
コバルオン「お前もだ、ビリジオン」
ビリジオン「いいじゃん♪バルは厳しいな♪」
コバルオン「……ハァ～」

コバルオンは溜め息をつき、ミスト達に振り返った。

コバルオン「人間達、コチラのダークライとビリジオンが失礼した」

ハヤト「いえいえ、別に良いですよ。こっちとしては伝説のポケモンを沢山見れたから満足だよ、なぁ皆？」

ミスト「……」
ハヤト「どうした？」
ミスト「……これは……夢だ……」
ハヤト「ミスト……？大丈夫か？」
ミスト「……」
ハヤト「お前らしくないぞ？」
ミスト「……」

しかしミストは珍しくぼ～っとしたまま、佇んでいた。

ハヤト「駄目だこりゃ…」

ハヤトが後の5人を見ると、

ヒカル「今のスープ……レシピをどうしたっけ……」

ヒカルはスープのレシピを考え、

マサヤ「……」

マサヤは放心状態に陥り、

リョウヤ「～♪～～♪～～～♪」

リョウヤは鼻歌を歌い、

ブイマル「父上と母上は元気で御座るかな……」

ブイマルは実家の事を思いだしていた。要するに皆おかしくなってしまっている。

シュウ「ヒュ～！！！凄え凄え凄え！！！最高の気分だＺＥ！！！」

ハヤト「何時も通りはシュウだけか……」（汗）

コバルオン「……（大変そうだな……）」（汗）

テラキオン「に、賑やかでごわすな」（汗）

ミュウツー「ま、まともな奴は居ないのか……」（汗）

当然の如く、初対面であるミュウツー達はこれを何時もの7人だと思ってしまう。

ビリジオン「ほらほら、ライ♪傷口がここにも♪いっぱいだぁ♪あ、痂剥（かさぶた）がしちゃお♪」

ダークライ「や、止めてくれ……」（泣）

いつの間にか、ダークライはビリジオンの玩具と化していた。

ハヤトとミュウツー達で何とかミスト達とビリジオンを止め、ハヤトが状況をミュウツー達に説明した。

ハヤト「と言う訳で、ヒカルがデオキシスを撃退したら、レックウザが来てデオキシスに全員収集とかレシラム達がアルセウスについたとか言って俺達が驚いてたら2匹でどっか行ったつう訳だ」

ミュウツー「うむ、説明ご苦労」
ダークライ「で、今の状況は？」
ビリジオン「だからカッコつけなくていいって♪」
ダークライ「……良いじゃないか……別に……」（泣）

ダークライはまた泣きだしそうになる。感情の起伏がかなり激しい。

ハヤトは堪り兼ねず、コバルオンにダークライの事を聞いてみた。

ハヤト「すみません、テラキオンさん」
テラキオン「なんでごわすか？」
ハヤト「ダークライさんって……何時もあんな風なんですか？」
（汗）
テラキオン「いや……何時もは真面目な奴なんでごわすが、時々ああなるんでごわす。なぁに、数日すれば戻るでごわすよ……ビリジオンがいなければの話でごわすがな」
ハヤト「な、なるほど、そうですか」（汗）

テラキオンのごわすごわすという偽物の力士の言葉の様な話し方に圧倒されつつあるハヤト。

と、ミュウツーが口を開いた。

ミュウツー「ダークライ、レシラム等がアルセウス側についた事はレックウザから聞いたな？」
ダークライ「あ、嗚呼」
ミュウツー「それについてだが……まだチャンスはある」
ダークライ「なんだと！！？本当か！！？」

リョウヤ「やべ、全く話について行けねｗ」
ブイマル「チンプンカンプンだな」
マサヤ「アルセウス側やら☆色々と☆もしかしたら選挙ですかね☆」
ミスト「……マサヤ……違うと思うぞ……」

7人は全く話についてこれていない……当たり前の事であるが。

ミュウツー「確かにゼクロム、レシラムは自分の意思でアルセウス側についた。だが、キュレムは2人がそうしたからアルセウス側に行っただけの事……キュレムならまだ考え直してくれるかも知れない」

ダークライ「成る程……そういう事か……」

ダークライも納得し、頷いた。さっきまでのあたふたしてた様子とは大違いだ。

ダークライ「それで、俺はどうすれば良い？」

ミュウツー「そこにいる7人の人間達の力を借りたい……私達が知っている以上に人間達は発展している様だ」

ダークライ「嗚呼、それは俺も目の当たりにした……だが、人間達を信用して良いのか？」

ミュウツーは少しだけ空に視線を向け、ダークライに向き直る。

ミュウツー「嗚呼……私は、信用して良いと思っている」

ダークライ「……変わったな、お前も」

ミュウツー「お前ほどじゃないさ、初めてビリジオンに会った時の事、覚えてるか？」

ダークライ「そ、その話はやめてくれ……」（汗）

ミュウツー「フッ……」

ミュウツーは微笑を浮かべると、コバルオン達がいる方を向いた。

ミュウツー「聞いての通りだ。皆は持ち場に……」

ビリジオン「へぇ～♪君はマルかぁ～♪」
ブイマル「どんな呼び名だよ！！」（汗）

テラキオン「だからおいどんはビリジオンの世話役を……」
ハヤト「あ…はい」（汗）

コバルオン「どうせ私は何の個性も無いからモブで空気なんだ…
…ブツブツ」
リョウヤ「元気だして下さいよ」（汗）

シュウ「色々な事が凄すぎだＺＥ！」

ミュウツーは黙って後ろを向き、溜め息をついた。

＊戦いを止めんとする者達＊（後書き）

後書き

リョウヤ「終わり方が超中途半端」

だって……ＤＳの容量オーバーでこれ以上は文字が入らないから……描写も幾つか消さないとならなくなったし……（汗）

テラキオン「おいどんをこんなキャラにした理由は何でごわすか？」

色々理由があって……（汗）

コバルオン「私は途中までは良かったが……最後の一言は？」

いや、気がついたらコバルオンが空気になってるなぁ、と思って（笑）

ミュウツー「もっとまともな奴を出してくれないか……」

大丈夫、ミュウ側も個性たっぷりだし、アルセウス側に至っては……うん、平凡な奴がいるかいないかのレベルだねｗｗ

ダークライ「この小説は大丈夫か？」

（多分）大丈夫！！！後からちゃんとシリアスに入るから！！！

コウタ「多分ついてるし（汗）で、どのくらいからシリアスに？」

君のバッジが8個たまってポケモンリーグをやってから物語はとてつもなく動きだす（予定）

ナオヤ「要するに未定だな」

すみません（汗）

ギラティナ「オレの出番が無いのが気になるが？」

ヒカル「何故スープから飛び出して来たの？」

それは次回分かる。

ハヤト「伝説のポケモン達の目的は？」

いずれ分かる。

レジアイス「何時になったら駄文じゃ無くなるのですか？」

それは僕が文章力が上がる様努力す「すみません、一生駄文でしたね」そう思うなら聞くなよ……ｏｒｚ

メイ「では読者の皆さん、感想や評価の方もお待ちしております！どうか次回もお楽しみに！！」

＊もうひとつの旅立ち＊（前書き）

またの更新！！！

コウタ「もう突っ込まない」

今回は！！！アニメからの「あの人」が登場！！！原作からも数人登場！！！しかも、アニメからの「あの人」のキャラ崩壊が激しい！！！

コウタ「誰が出るの？」

それはお楽しみ、ほぼ確実に予想外だろうねｗ

では、本編スタート！！！

＊もうひとつの旅立ち＊

ミュウツー「……ダークライ、手伝ってくれ」
ダークライ「嗚呼、後が怖いがやるしかない」

２匹はビリジオン、テラキオン、コバルオンに向けて技を放った。

ミュウツー「サイコブレイク！」
ダークライ「ダークホール！！！」

２匹の技により、３匹は吹っ飛んだ後寝てしまった。

ビリジオン「ライとウツーの考えなんてお見通しだよ♪」

ビリジオンを除いて。

ダークライ「なっ、何故！！？」

ビリジオン「しんぴのまもり♪ウツーのは痛かったけどね♪」
ダークライ、ミュウツー「……ヤバい……」（冷や汗）
ミュウツー「さて、人間達。ちょっとこちらに来てくれ」（汗）

焦ったミュウツーは慌ててミスト達を呼び集める。

7人「ハイ！！」

ダークライ「ミュウツー……それはズルいぞ……」
ビリジオン「ギガドレイン♪」

ダークライはビリジオンに体力を吸いとられ、倒れた。

その間、ミュウツーは7人に戦いの全貌を教えていた。

ミュウツー「……と言う訳だ」
リョウヤ「ま……マジかよ……」
ブイマル「伝説のポケモンってそんなに偉いのかよ……」
ミュウツー「そんな訳無いだろう。あいつらは下らない目的の為にぶつかりあっている……直接的な戦闘は今のところないが、放っておけばもしかすると……いや、確実に前の様な世界を巻き込む戦争になる」
ミスト「……いつ頃だ……？」
ミュウツー「それは分からない……まだ全ての伝説のポケモンが自分の立場を決めている訳では無いからな……今はどちらも、立場のはっきりしていない奴への説得を繰り返している」
ハヤト「宗教団体かよ！？」
ヒカル「実力行使はしてないんですか？」
ミュウツー「そんな事をしても私達は従わない、実力行使は人間や普通のポケモンを脅す時か、相手を本気で潰す時しか使わない。

だからどちらも仲間が集まるまでは実力行使に出ないだろう」
シュウ「相手の数はどのくらいＫＡ！！？」
ミュウツー「私達が知っているだけでミュウ側が１１人、アルセウス側が１０人だ。こちらは６人いる」
マサヤ「少ないですね☆」
ミュウツー「嗚呼、後のは皆、立場がはっきりしていない……これで私達が知っている事の全てだ」
ビリジオン「じゃあもういいね♪ウツー♪」

ミュウツーがびくっとして、ゆっくり後ろを振り向くとそこには、笑顔のビリジオンが立っていた。その横にはダークライが倒れている。

ビリジオン「さっきのは痛かったな♪」
ミュウツー「あ……いや……す、すまなかっ……」
ビリジオン「ギガドレイン♪」
ミュウツー「ギャァァァァ！！！……」（バタッ）

ミュウツーはビリジオンに体力を吸いとられ、ダークライの横に倒れた。

ビリジオン「回復♪」
ブイマル「……俺、ミナモに行って薬買ってくる……」
ミスト「……頼んだ……」

ブイマルはグライオンを出し、ミナモへと向かった。

シュウ「ワッハ！！！凄過ぎだＺＥ！！！」
ヒカル「シュウ先輩、落ち着いて下さいよ」

ブイマルの出発後、何故かシュウは物凄く興奮していた。

シュウ「だってＳＡ！！さっきから伝説のポケモン達のレベルを測ってたんだけどＹＯ！！！」

シュウはそう言って、自分のポケナビの画面を皆に見せる。
ポケナビとは、ポケギア、ポケッチ、ライブキャスターに並ぶこの世界の通信機器である。しかし、機種によって１つ１つの色々な特徴が存在する。
例えば、ポケナビは電話機能とマップ表示の他にポケモンのレベルやコンディションを確認する事が出来る。
ポケギアなら電話、マップ表示、特徴としてラジオを聞くことができ、ポケッチはトレーナーでなくとも使える様々なアプリを入れる事も出来る。ライブキャスターにはテレビ電話というものが付いている。人によってどれを使うかが違うため、どの種類の機種同士でも電話はする事が出来る。トレーナーには、主にポケモンのレベ

ル等を確認出来るポケナビと、ラジオで情報を手に入れられるポケギアが人気だ。

ポケナビのレベル測定機能により、表示された伝説のポケモン達の強さ……それを見た5人は驚愕の表情を浮かべた。

ミナモシティ、ミナモデパート出口。

ブイマル「回復の薬３０個、元気の欠片３０個、プラスパワー等の道具各種……大体２０万位かかったな、７人の財布が共同で良かったぜ」

ヨノワール「ワール！」

グライオン「グラッ！」

そこから出てきたのは、先程薬を買って来ると言っていたブイマルとヨノワール、グライオン。ブイマルとヨノワールは沢山の荷物を持っている。かなり買った様だ。

ブイマル「さて、早く戻らないと……ん？あそこにいるのは……？」

ブイマルが下の方にいる誰かを見て、はっとした。

ブイマル「師匠……？」

ブイマルはその人物の元へ駆け寄った。

？？？「うん、やっとホウエンに着いたよ、久しぶりだな」

ブイマル「師匠！！！」

その男……ブイマルに師匠と言われた男は、声がした方を向いた。

???「ん……君は、ブイマル君かい？」

ブイマル「はい！ホウエンに来てたんですか！？」

???「シンオウを拠点にしてたから、今年のリーグはホウエンのに参加しようと思ってね。腕ならしにミクリさんとダイゴさんと戦いに来たんだよ」

ホウエンのWチャンピオン……ミクリとダイゴに挑もうというこの男、実は何らおかしい事はない。何故なら、この男は……

ポケモンマスターと言われている3人、ＷＣＲの常時ＴＯＰ3の1人なのだから。

ブイマル「やっぱりですか、凄いですね」

プルルルルルル

と、ブイマルのポケギアがなり始めた。

ブイマル「あ、ちょっと待って下さい……おう、ミスト。どうした……なっ！！？Ｌｖ７００！！？」

？？？「！！？」

ブイマル「お、おう、分かった。すぐ戻る……（プツン）……すみません、師匠。ちょっと用事が……」

？？？「その話、僕も興味があるね。詳しく聞かせて貰って良いかい？」

ブイマル「（……師匠なら…信用出来る！！！）……分かりました。時間が無いので説明は飛びながらでいいですか？」

？？？「うん、構わないよ」

男はモンスターボールを構える。

？？？「バルジーナ！そらをとぶ！！」

ブイマル「グライオン、俺達もだ！！」

男はバルジーナ、ブイマルはグライオンに乗りヨノワールと共に１２０番道路へと向かった。

ブイマルは、空中で男と男のポケッチで通話をしている人物に今までの事をざっと説明していた。

???「伝説のポケモン達がそんなに……」

???A『このホウエンでそんな事が……』

???B『僕も見てみたいな』

ブイマル「そんな事を言ってる場合ですか？ダイゴさん」

ダイゴ『そうだね、そんな強力なポケモンが争いを起こせば大惨事は免れないだろうし。何としてでも阻止しないとね、ミクリ』

ミクリ『そうだね』

電話の相手はホウエンのWチャンピオン、ダイゴとミクリ。

？？？「そろそろ見えてきた……あそこだね」
ダイゴ『僕も今から向かうよ』
ミクリ『私は他の地方のチャンピオンに収集を行う』
ブイマル「はい、お願いします。ミクリさん」

そしてミスト達の真上に来たバルジーナとグライオンは降下し始めた。

ブイマル「ただいま、皆」
？？？「やぁ、久しぶり」
リョウヤ「おか……え？」
ハヤト「貴方は……」
マサヤ「ミストさんと☆ブイマルさんの☆師匠ですね☆」
ミスト「……先生……！？」
シュウ「これなら百人力だＺＥ！！！」
ヒカル「先ずは何故シンオウからホウエンに来たのかを突っ込むべきでは？」

６人は男の登場に対し、様々な反応を見せる。

？？？「前回のＷＣＲぶりだね、元気にしてたかい？」
リョウヤ「はい！……

タクトさん！！」

タクト……それがこの男の名前だった……

タクト「で、伝説のポケモンって言うのが……」
ビリジオン「君も悪い人間じゃないね♪僕はビリジオンだよ♪よろしく♪」
タクト「君か……よろしく、僕の名前はタクトだよ」
ビリジオン「分かったよ、タク♪」
ハヤト「また略してるし」（汗）

タクト「タクか……良いよ、それで呼んで。それで、他にはいないのかい？」
ヒカル「あそこに……」

ヒカルが指差している先には、気絶しているダークライとミュウツー、眠っているコバルオンとテラキオンがいた。ダークライ以外の3匹は皆苦しそうな表情を浮かべている。

ビリジオン「ライの特性のナイトメアだね♪ライの近くで寝ると悪夢を見て苦しむんだ♪」
ブイマル「一緒に寝たくないな」（汗）
ビリジオン「だからライはいつも皆から離れて1人で寝てるよ♪」
ヒカル「それもそれで寂しいですね」（汗）
タクト「で、今はあの3匹を回復させるのが先じゃないかい？」
ミスト「……そうですね……」

8人は薬を使い、3匹を回復させた。

ダークライ「う……」
ミュウツー「これは……体力が回復している？」
テラキオン「人間はここまで進歩していたでごわすか……」
コバルオン「凄い……本当に凄いな……」

回復した3匹は人間の進歩に改めて感嘆する。

ブイマル「売ってるやつで一番良いやつだからな」
ダークライ「そんな良い物を……ありがとう」
ブイマル「良いって事よ！」
ヒカル「いくら使ったんですか？」
ブイマル「２０万位だな」
リョウヤ「有り金の３／４だな」
ハヤト「使い過ぎだ……」

リョウヤ達が呆れていると、上空から鳥ポケモンの羽音が聞こえてきた。

タクト「エアームド……ダイゴさん！！」
ダイゴ「やぁタクト君、皆、そして……伝説のポケモン達」

ダイゴはエアームドから飛び降り、ボールに戻す。

ダークライ「お前は……？」
ダイゴ「僕はダイゴ。ホウエンのチャンピオン、要するに人間のリーダーの１人さ」
ミュウツー「ビリジオン、あいつは信用できそうか？」
ビリジオン「うん♪大丈夫だよ♪」
ミュウツー「そうか……」

ミュウツーは頷くと、ダイゴに振り向く。

ミュウツー「私の名はミュウツーだ、宜しく」
ダイゴ「こちらこそ……それで、色々と詳しく説明してほしい」

タクト「僕も聞きたいね」
ミュウツー「分かった」

2人はミュウツーの話を聞き始め……

ダイゴ「あっ、ちょっと待ってて」

ダイゴは何かをふと思いだし、ポケナビを誰かに繋ぐ。

ミクリ『ダイゴか、伝説のポケモン達には会えたか?』
ダイゴ「うん、そっちもあつまった?」
ミクリ『嗚呼、レッド君、シロナさん、アデクさん、皆来ている。既に回線を繋いでいるから、お前達の声は全てこちらに聞こえてる』
ダイゴ「ありがと、ミクリ……じゃ、話を聞かせてくれ」

ミュウツー「かなり便利な物だな……まぁ良い」

ミュウツーは先程7人に説明した事をタクトとチャンピオン達に話し始めた……

ミュウツー「と、言う事だ」
タクト「……スケールが大きいね」
ダイゴ「でも、事実なんだね」
ミクリ『……こちらでも驚きの声が聞こえている。ダイゴ、戻ってこい。今からフロンティアブレーンも呼んで会議を行う。ジムリーダーは一般市民に不安を与えない様、各々のジムで待機となる』
ダイゴ「ＯＫ！分かったよ」

ダイゴはエアームドを出し、飛び乗った。

ダイゴ「急ですまないけど、僕は帰るよ」
ビリジオン「じゃあね♪」

＊もうひとつの旅立ち＊（後書き）

ダイゴが見えなくなった後、ミュウツーが口を開いた。

ミュウツー「では、そろそろ行こうか」
テラキオン「そうでごわすな」
ブイマル「どこに行くんだ？」
ミュウツー「ダークライ、そして人間達にはイッシュのボルトロス達を説得して貰いたい」
ダークライ「お前達は？」
ミュウツー「私とコバルオンはシンオウ、ビリジオンとテラキオンはここ、ホウエンの奴等を説得する」
ダークライ「なるほど」

ダークライは頷く。

ダークライ「そう言えば……ギラティナは？」

ミュウツー「あ……」

ミュウツーはしまった、という顔をした。

ミュウツー「すまん！人間達は水技が出来るポケモンを出して、空中に撃ってくれ！！」
ミスト「……分かった……」

ミスト達のポケモンが撃った水を、ミュウツーがサイコキネシスで浮かべる。

と、急に水球の表面が揺らぎ始め中から巨大なポケモン……ギラティナが出てきた。

ギラティナ「遅いぞ、どれだけ待ったか分かっているのか？」
ミュウツー「すまん、忘れてた」
ギラティナ「おい！！？」

ギラティナは思いっきりずっこけた。

ヒカル「水から……」
テラキオン「そう、おいどん達はギラティナの光を反射するものと違う世界を繋げる力を使い、スープから出てきたんでごわす」

ミュウツー「……で、ギラティナはキュレムを説得してくれ」
ギラティナ「分かった分かった」

ミュウツーはギラティナに人間達が何処まで進歩しているかを伝えると、ギラティナの行き先を告げた。

ビリジオン「じゃあ♪行こうか、ラキ♪」
テラキオン「分かったでごわす」

ミュウツー「コバルオン、私達も行くぞ」
コバルオン「どうせ私は空気……モブ……影なし……ｏｒｚｏｒｚｏｒｚ……」
ギラティナ「コバルオン……がっくりし過ぎだ……では、オレももう行くか」

そして5匹は去って行った。

リョウヤ「さて、俺達も行くか」
シュウ「行き先はイッシュだＮＡ！！！」
マサヤ「早く行きましょう☆」
ハヤト「お前達、何してたんだ？」
２人「バトルして（ました☆）たＺＥ！！！」
５人＋１匹「……」
タクト「いつ、どんな時でも修行を欠かさない、良い精神だ」

だいぶカオスだが、８人と１匹が戦争を止めるため、今旅立った

……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

やっと後書き

コウタ「ここ本文じゃないよね？」

文章が入らなかったので、区切りが悪くなる等色々な理由からこうしました。読者の皆さん、読みにくい文章ですみませんでした。

＞（＿＿）＜

タクト「で、僕が「あの人」か」

そう、良い意味でのキャラ崩壊。ネットで調べたら君の批判は物凄いよ、僕も君が伝説厨じゃなかったら一番好きなキャラだったね。

だからこの小説では……

タクト「手持ちが普通か」

そういう事♪性格も丸くなってるし、名前と外見以外は別人だね。
「タクトは伝説厨が良いのに！！！」と言う人はすみません。それから、ポケッチの電話機能は僕のオリジナルです。

タクト「次回はどういう話だい？」

次回はね……なんと！！！『ミュウ側の会議』（仮）

タクト「仮か……でも興味深いタイトルだね」

そゆこと♪では、読者の皆さん、感想や評価の方も宜しくお願いします！！！

～会談：ミュウ側～（前書き）

今回と次回は、伝説のポケモン大量出場！！！人気投票はこの次の次にするので、お楽しみに！！！

コウタ「してくれる人がいるといいね」

～会談：ミュウ側～

どこかにある暗く広い洞窟……そこにレックウザとデオキシスの姿があった。

２匹が奥へ奥へと進むと、かなり開けた所につく。

デオキシス「やっとついたか、何時もながらデカい洞窟」

？？？「そりゃオイラが入るんだからでっかいよ～ん、デカい貝かい、オムスターだっよ～ん」

？？？ｂ「全く……お前は私と違いバカだな、この最高の私を見習え」

急に声が聞こえてきた。

レックウザ「……グラードン、くだらんダジャレもどきはやめろ。カイオーガも自分を最高とか言ってると気持ち悪いぞ」

グラードン「くだらなくないよ～ん、だから泣くないよ～ん」

カイオーガ「気持ち悪いとは酷いな……だって私が最高というのは事実だろ？」

デオキシス「……（いつも思う、このダジャレードンとナルオーガ、俺が殺っていいのかな？）」

奥の方にいた巨大なポケモン……グラードンとカイオーガに殺意を抱くデオキシス。いきなり組織が空中分解しそうである。

？？？ｃ「デオキシス、落ち着つきなさい」

レックウザ「ミュウ、あいつらは何時もの事だろう」

ミュウ「だけど……」
レックウザ「で、他の奴等は？」
ミュウ「あそこに」

一番奥からでてきた薄ピンク色のポケモン、ミュウが指差した方には、虹色の羽を持つ鳥ポケモンと、それに付き添う2匹のポケモン、銀色の羽を持つ鳥ポケモンと、同じくそれに付き添っている3匹のポケモンがいた。

レックウザ「ホウオウ、エンテイ、ライコウ、ルギア、ファイアー、サンダー、フリーザー……スイクンはまた来てないのか？」
ホウオウ「スイクンは　ここには来ない　何故ならば　戦う事が嫌だと言うから～　字余り」
ライコウ「要するに、スイクンは戦いたくないと言ってるんです」

ライコウがホウオウの短歌口調を訳す。

ルギア「その話し方はやめろって」
ホウオウ「できないさ　これが私の　個性です」
エンテイ「要するにこの口調をやめるつもりは無いそうです」
レックウザ「本当に面倒くさいな」
今度は川柳口調。

ルギア「で、アルセウス達への対策と何時もの議題の会談は？」
ファイアー「まずは皆が落ち着かなければならないでしょうな」
サンダー「あそこの3人のせいで何時も何時も遅れているのだからな」
フリーザー「気長に待ちましょうか」

それで、こちらは噂のデオキシス達。

デオキシス「そろそろ黙れてめぇら！！！俺とやんのか！！？」（怒）

グラードン「お前の喧嘩っぱやさには飽きたよ～ん、秋にも飽きたよ～ん」

デオキシス「じゃあ今年の秋になる前にあの世へ逝かせてやるよ！！！あそこはずっと春だからな！！！」（怒）

グラードン「お～怖いよ～ん、その声～色」

デオキシス「マジざけんなよ！！！」（激怒）

カイオーガ「まぁまぁ、この素晴らしい私の様に落ち着け」

デオキシス「おめぇら、本当に殺るぞ！！！」（激怒）

カイオーガ「この完璧な私を脅すとは……君も思い上がったね」

グラードン「カイオーガも十分に思い上がってるよ～ん」

このトリオはだいぶ息があっていそうだ。ダジャレードンとナルオーガがボケ、デオキシスが突っ込みで売れるだろう。

デオキシス「何が売れんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

グラードン「うるさいよ～ん、売るサイド～ン」

デオキシス「一体何を売るんだぁぁぁぁぁぁ！！！」

カイオーガ「勿論、私の美しいグッズさ」

デオキシス「……もういい……俺の負けです……ｏｒｚ」

デオキシスはとうとう諦めましたｗ。

レックウザ「終わったな」
ホウオウ「デオキシス　何時も何時も　乙ですね」
ライコウ「要するに、デオキシスは何時も2匹に勝ててないので今日の勝負もお疲れ様でした、という意味です」
ルギア「哀れな奴」
ミュウ「はいはい、本題に入るわよ」

ミュウが沸き立つ？皆の注目を集める。

カイオーガ「分かった、何時もの議題からかい？」
ミュウ「ええ、まずはそうしましょう」
レックウザ「今回の司会は私がしよう、いいかね」
ホウオウ「構わない　早く話を　始めよう」
エンテイ「それで構わないから、早く話を始めようという意味です」
ルギア「今の訳はいらなかったと思うが？」
ミュウ「もう雑談しない」

ミュウの一声で、皆は黙る。

レックウザ「では、何時もの議題……

さぁ、どの種族の生き物達を

滅ぼすか、皆でじっくり話あおう。適当に決めては行けないぞ……やり過ぎは良くないからな」

～会談：ミュウ側～（後書き）

後書き

コウタ「目的がありきたりじゃない？」

まぁ、まだアルセウス側もあるからね。片方はこうしたよ。

コウタ「何匹か凄いキャラがいたけど？」

個性だよ、個性。僕が嫌いなポケモンな訳じゃない。むしろグラードンは好き。カイオーガも好きな方。

コウタ「次回が……」

アルセウス側、キャラが濃い奴が多いね。次回とその次はなるべく早く書こうと思います。それでは！！！

コウタ「感想、評価等宜しくお願いします！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9388y/

ポケットモンスター　終らぬ戦い　変わりゆく世界

2012年1月15日01時56分発行